

# 染められ奥さん

小説 木森山水道（夜山の休憩所）

「ご挨拶」

この度は、DL & ご鑑賞いただき誠に有難うございます。  
気分転換、活力復活、ぐっすり眠れる等の効用が現れれば幸甚です。

「製品版と体験版の相違点」

体験版には文章と挿絵の全てが収録されておりますが、  
製品版には次に挙げるおまけ要素が追加されます。

- ・挿絵に使用した全CG（7枚分）のデータを同梱。  
（サイズは800×600。JPEG形式）
- ・挿絵を纏めたPDFデータを同梱。

「ご注意ください」

- ・PDF閲覧ソフト（Adobe Reader 7と9と で確認済み）によっては「見開き」で見る際、ページが右から左へ進みます。
- ・本製品はフィクションです。また、個人の範囲でお楽しみ下さい。

お楽しみいただけましたら、  
製品版のご購入を是非ご検討くださいませ。

挿絵は、メーカー様の利用規約に基づいて  
「佐野俊英があなたの専用原画マンになります」（G・J?様）  
を利用して作成しました。  
尚、当サークルはG・J?様とは無関係です。

『佐野俊英があなたの専用原画マンになります』  
利用規約に基づく表記 シリアルコード S/N:GJ0079908

目次

第一話	幸せ夫婦	3
第二話	友人夫婦	20
第三話	染みを消すために	45
第四話	望まぬ約束	73
第五話	心と身体に広がる染み	79
最終話	新しい幸せのカタチ	121

主な登場人物

三葉田 麗（みはだ うるわ）	二十七歳。	勝気な良妻。夫を深く愛している。
入巢 京一郎（いるす きょういちろう）	三十一歳。	実業家。野生的なハンサム。
三葉田 幸田（みはだ こうた）	二十七歳。	会社員。妻の麗とは相思相愛。
入巢 美月（いるす みつき）	二十七歳。	京一郎の妻で麗の友人。

# 第一話 幸せ夫婦

とある夏日の夜、三葉田家では。

「それじゃ、今度の土曜日にね」

三葉田麗は受話器を置いた。通話相手は大学時代の同級生で、夫も知っている女性だった。

卒業後は疎遠になっていたのだが、先日、町中でばったり会った時に連絡先を交換し合い、今の電話でまた会う約束をしたのだった。

ガチャガチャ……ガチャリ、キーツ。

「ただい あ、麗。ただいま」

「おかえりなさい、あなた」

玄関の扉を開けるや否や、すぐそばの固定電話の所にいた妻を認め、夫の幸田が帰宅を告げた。

妻は満面の笑みで迎え、彼の仕事鞆を受け取る。

「夕飯はできてるわ。それとも先にお風呂がいいかしら。沸かしておいたから入れるわよ」

「先に夕食をもらって、それからお風呂にするよ。今日もありがとう」

甲斐甲斐しく世話をしてくれる妻に夫が微笑んだ。幸せを噛みしめているような優しい顔で、見ている麗の胸が温かくなった。

(いつも言われていることとはいえ、なんだか照れるわ……でも、嬉しい)

夫にそんな微笑みを向けてもらうと、この男性の妻である喜びが湧いてくる。

尽くしているのはただ愛しているからというだけであり、見返りを求めているわけではないが、妻として頑張っていることが報われた気分になんてさせてくれる。

夫婦は一緒に食卓についた。夕飯は、さばの味噌煮、黒ごまを振ったほうれん草のおひたし、千切りにして鰹節をかけたモロヘイヤ、あさりの味噌汁、そしてほかほかご飯というメニュー。

湯気が上り、味噌の香ばしい匂いがくゆる中、今日あった他愛ないできごとを話しあい、ふたりは食事をすませた。

夫は出された物をすべて平らげ、味噌汁とご飯、それにモロヘイヤをおかわりした。

「ごちそうさま」

「お粗末様でした」

簡単な礼に、麗はにこにこしながら返事をする。

夕飯の次は入浴だった。夫がすませた後に、夕飯の後かたづけをした妻が入る。

「さてと……これからあの人に見せるんだから、しつかり磨いておかないとね」  
ボディースープをスポンジにたっぷりまぶし、麗は鼻歌混じりに身体の隅々まで洗う。

専業主婦の麗は二十七歳。

夜空色の髪は肩にかかるセミロングだった。気の強そうな切れ長の目に、細い頬と尖り気味の顎、スツと通った鼻梁に色と肉付きが薄目の唇を持っている。芯の強い性格を如実に表した端麗な容貌だった。

夫に喜んでもらうよう、運動や食べ物や健康薬品で磨き続けているだけに、肢体も抜群にいい。

釣り鐘型の乳房は八十八センチFカップで、胸板の正中線に深い谷間を作っている。本体にマッチした、ほどよい大きさの乳輪と乳首は鴉色で、互いに反対方向を向いていた。

腋の下から腰骨にかけてくの字にくびれたウエストは五十八センチ。八十八センチの尻尾は、最近脂が乗ってきていて、まだまだ膨らむだろう。

お尻が高い位置にあるので足が長く、手もスラリとしている。

無毛の股間では、夫との夜の営みで鍛え上げられた肉花卉が息づいている。唇みたいにはつきりと肥厚しているさまは、清楚な外見と裏腹に淫らで、バラ色粘膜が見え

隠れしているのも、彼女が性経験豊富なオンナであることを物語る。

「これくらいでいいかしら」

ソープの泡を流し終え、身体を見回す。麗の肌はきめ細かく、水の滴をはじくほどに張りに富んでいる。色は淡雪めいた生白さで、全身の隅々まで見通してもシミや肌荒れの類は一カ所もない。十代の健康的な乙女と張り合える美肌なのだ。

この肌は夫もよく褒めてくれる。女として美しくありたいという気持ちもあるが、何より彼を喜ばせたくて、プロポーションの維持向上以上に気を使いながら、大事に手入れをしているものだった。

「うん、我ながらほればれするツヤツヤぶり。今夜もあの人、喜んでくれるわよね」  
肌の状態に満足し、これから行う夫婦の夜の営みに思いを巡らせる。

今日はこういう風にあの人を愛してあげようか。今夜も、仕事の疲れが吹き飛ばくらしいに熱烈に尽くしてあげたい。そして、あの方は自分をどんな風に愛してくれるのだろうか。

浴室内の気温とは無関係に、頬の体温が上がっていくのを覚える。自然と、胸がドキドキしてきた。

無論、それは不快な動悸ではない。想い人を思う乙女が味わう甘さと、オンナの悦びを知る大人だけが知る官能を孕む心地のいい感覚だった。

## 第一話 幸せ夫婦

入浴を済ませ、パジャマ姿で夫婦の寝室にいくと、キングサイズのベッドに腰掛けて夫が待っていた。

その顔は、妻という最愛の女性を愛する瞬間を待ちわびる夫の顔であり、抜群のプロポーションを持つ気の強そうな美人と性交渉できる嬉しさに鼻穴を大きくしている浅ましい牡の顔だった。

「おまたせあなた。今夜もいっぱいしましょね」

部屋の照明を落として、ベッドの側に設置してある明かりを点ける。暗闇の中ベッドとそのごく狭い周囲だけがぼうつと浮かび上がる。

こちらを見つめている夫を見返しながら、パジャマのボタンに手をかけた。一人で着替える時よりもゆっくりと上を脱ぐ。

エッチをすることは決まっていたので、ブラをつける意味はない。八十八センチFカップの釣り鐘巨乳が転げ出た。ゆったり振幅しながらやがて落ち着く。熟れた果実のように膨らむ房の真ん中にある乳首は、互いにそっぽを向き合っている。

妻の情感たつぷりのストリップを、生唾を飲みながら見守る夫。

（見てる……私のおっぱいをあんなにじつと見て……）

愛する夫のああいう視線はやはり恥ずかしい。彼を喜ばせるために勉強して身につけた商売女みたいな所作を披露するのは今夜が初めてではないが、だからと言って慣

れるものでもない。

(ああ……おチンチンがあんなに……興奮してくれているのね……)

太腿を開き気味にして腰掛ける夫の股間は、パジャマのズボンを突き破らん勢いで、斜め方向に隆起している。妻の美体を目にする事で、ペニスに血が流れ込んでいる証だった。

オンナとして男を釘付けにしている誇らしさが湧き、ペニスで可愛がられるオンナとしての期待感が膨らんでくる。この瞬間が好きなことも、麗が淫らなストリップをやめない理由だった。

勝ち気そうな妻は、吐息を微かに乱しながらズボンを脱ぎにかかると、

わき腹から尻に至る斜面を手の平で滑りながら、パジャマズボンのゴムが締め付ける腰骨に指を差し込む。

まだまだ膨らみ途上のむっちりした尻たぶを引っ張り越えさせると、ズボンの胴回りにはゴムの収縮力を発揮させ、太腿に沿って絨毯に静かに落ちた。

ゴクリ……。

夫がまた、唾を飲み込んだ。今度は部屋中に響く大きな音がした。

すぐに夫に貫かれてもいいようにショーツを穿いていなかった無毛の股間が、彼の瞳を独占する。陰唇は、妻冥利を滲ませながら控え目に、けれど男の肉棒の到来を誘

うように淫靡に、仄かな左右開閉を行っていた。

「おいで、麗」

優しい呼びかけは、情欲を含んでいた。夫はその場でパジャマを脱ぎ捨てる。彼も下着を穿いていない。

夫の幸田は、まじめで誠実な性格を表した整った顔立ちをしている。中肉中背で、運動不足ではあったが贅肉はほとんどない、スマートな身体をしている。

「はい、あなた……」

そんな夫へ子供のように頷き、隣に腰を下ろす。ベッドの白いシーツの上で、柔らかい尻たぶがむにゆりと形を変える。

麗のシャンプーとボディソープの匂いがふたりを包む。夫も石鹸とシャンプーで洗髪と身体洗いを丹念にやったが、妻のそれの方が匂いは濃い。

加えて、彼女の場合はミルクのような甘い体臭を放っている。男には真似のできない、母性と色香を感じさせる匂いが、幸田の獣性を刺激する。

半身を捻って妻を向き、細い撫で肩を抱く夫。最小限の照明に照らされる彼女の肌は、雪を纏っているように白く、そしてきめ細かな美肌だった。

夫だけに捧げるために、たゆまぬ努力で作り上げた肉の美術品である。

そんなものの持ち主の妻が、そっと目を閉じ、顎を上向かせ、夫の接吻を待っている。

る。

ちゅっ…………ふむっ…………ちゅっ。

(きた…………幸田さんの唇)

妻は目を閉じたままで夫の唇の感触を味わう。厚くて柔らかいが、男性的な生硬さがあり、オンナ心を刺激してくる。

ほどなくして夫は、妻の上下の唇の隙間から舌を入れてきた。麗はごくごく自然に受け止め、自分も舌を絡ませる。右へ左へ、螺旋状に、自分の口腔で彼の舌と舐め回し合いを演じる。流れ込んでくる唾液と湿り気の多い吐息を飲み込む度に、身体が火照ってくる。

「んくんくっ、はあ〜、あなたあ…………べろべろべちよべちよ…………私、あなたとのキス大好き…………」

「ぼくもだよ、麗…………ああっ、気持ちいい…………」

キスだけで満ち足りた顔をしている夫へ、妻はいたずらっぽく目を弛ませた。

「あむっ…………んっ…………もっと気持ちよくしてあげる…………ああ、あなたも私を気持ちよくしてえ…………」

そう言うと、キスをしながら夫の男へ手を伸ばす。ストリップ鑑賞だけでも勃起していたペニスは、キスの快感でさらに硬さを増していた。自分も快感が欲しいとでも

第一話 幸せ夫婦

いうように、切なげに震えている。

（はああ……興奮してるのね……わたしに……）

夫のペニスサイズは成人男性の平均程度。ただ、妻との性交渉で磨かれていて、初々しさなどはない。

亀頭は剥き出しで、経験の多さに裏打ちされた赤黒い体色をしている。竿部の皮も熟し過ぎたバナナのように黒ずんでいる。浮いている血管も太くて青い。

肉柱の反り返り度合いは九十度を越えており、陰毛がきれいに処理されているのが、逆に迫力を醸し出している。陰囊も大きめで、精液がたっぷり詰まっていそうにタップアップしている。

（あなたあ……）

見慣れているのに、見る度にうっとりさせられる肉棒だった。淫らに胸の鼓動を早めながら、竿の真ん中あたりに細い指をそっと絡ませる。指も、肌と同じく白い。

（ああ……熱い……硬い……いやらしいおチンチン……触れているだけで、私も興奮しちゃう……）

夫への愛情と肉欲とに背中を押されながら、触れている手の平を筒状に丸め、男が自慰をする要領で扱く。白い手に包まれた黒みがかつたペニスに、現れたり消えたりを繰り返す。

握る強さは軽く握る程度。ローションなどの潤滑油のない手淫なので、扱く強さも気をつけるが、えらの張ったカリ首はなるべく強く刺激するよう心がける。

「麗……いいよ、はあ……はあ……ちゅっちゅっ」

キスをしながら、絶妙な力加減で扱かれて、夫は堪らなそうなあえぎ声を上げる。もつと快感を貪りたいとばかりに、いつそうキスに耽溺する。舌に籠もる力が強まり、ひっきりなしに妻の舌を舐め回す。夫の欲情が伝播した彼女も舌の絡ませ合いを加速させる。

さすっ、そくくっ、さすりさすり。

その一方で、夫も妻の秘所へ手を伸ばす。幾度も性交渉で熟した陰唇を、指の腹で上から下、下から上へと撫で回す。

（んっ……オマンコ気持ちいい……もつとして、あなた……）

吐息をぶつけ合いながら唇と舌を触れさせるキスの甘さや、勃起ペニスを扱く女冥利とはまた違う、オンナ心にじゅんとくる気持ちよさに襲われる。精神的な快感だけでなく、肉体的にもいい。撫でられる度にチリチリした甘痒さが起こる。

（ああっ……強くなってきた……堪らないわ……）

よく肥厚した肉畝の隙間から愛液がトロトロ漏れだした頃、夫は撫でるだけでなく指で押ししたり、股間全体を軽く摘んだりという動作も入れてきた。秘所の芯まで響く

ような甘ったるい快感が、麗の欲望を膨らませる。

自分の手元から聞こえてくる、にちゃにちゃという卑猥な水音に気がついて目を向けると、夫が先走り汁を漏らしていた。透明な男汁で汚れた白い手が、照明に照らされてテラテラしている。

「あなた、そろそろ……ね？」

自分も堪らなくなってきたので、妻はベッドの上にゴロンと仰向けになった。足を広げ、夫が割り込むスペースを作る。

「ぺろっ……あなたあ、きてえ……ちゅぱっ……はやくう……」

潤んだ目でおねだりしながら、手に付着した先走り汁を舐める。

（はあああ……こんな淫らに夫を誘って……恥ずかしい……でも、カウパーのお汁美味しい……）

愛する男性の体液は、仄かに苦くて塩辛いが、胃に流し込むとお腹が心地良い熱さに包まれる。

蛇口から水を流しているみたいに愛液を溢れさせている女の部分に突き刺さる視線も、身体を心地よく火照らせる。

淫らにおねだりする妻の媚体をオカズにして、先走り汁をタラタラ漏らしているペニスの逞しさは、弥が上にも女の欲望を大きくさせた。

「ああ……いくよ麗……」

妻が空けた隙間に正座し、ほっそりした太腿を両脇に抱える夫。

その目は、妻の身体の隅々を走る。グラマラスな輪郭と魅惑的なふくよかさ、そして群を抜く美肌が夫の興奮を大きくする。

秘所の直前にあったペニスが、ビクン！ と跳ねた。

「あああ、きてきてあなたあ……あなたの興奮したペニスで、私を可愛がってえ……」  
頭のとっぺんに響いてくる、牝の媚を孕んだ淫声で言う妻に頷くと、バラ色粘膜が微かに覗く白い秘唇に、先走り汁まみれの赤黒い亀頭を宛てがう。

麗の心臓が、ドキンドキンと荒れ狂う。

「んんんっ……あああああああ……」

カリ首に肉花弁を拡張されたかと思った矢先、夫はゆっくりと挿入を深めてきた。入り慣れた膣孔をエラの張ったカリ首で広げながら、奥へ奥へと進んでいく。

（幸田さんの熱さが……お肉の存在感が……はああああ）

愛する夫の体温と肉棒の圧力が膣の中に入ってくるのは、それだけで目が眩む陶酔感を感じさせた。これまで何度も可愛がってくれた逸物に、また可愛がってもらうのだというオンナの歓喜も湧いてくる。

「あ……あっ……あああ……アアア……奥まで、はあ、はあ、奥まできたわあ

……ああ……」

妻の膣は夫のペニスサイズにフィットしているので、最奥と最先端は容易に出会える。子宮口にあるボルチオ性感帯も開発済みなので、コツンコツンと先っぽを当てられるだけで、息の詰まる快感を覚える。

「あなた突いて突いてえ、私を、今夜も可愛がって」

勝ち気そうな顔立ちで、実際性格もそうなのだが、普段の麗は冷静で物静かだった。近所や友人の間でも、貞淑な妻で通っている。

だが、夫婦のベッドの上では、こんな風に浅ましいところもある。特に、子宮口を責められるのに弱く、突かれると淫らな言葉を口走ってしまう。

「ああ、いつも尽くしてくれる感謝を込めて、今日もやりまくるよ」

纏わりついてくるミミズ千匹と、子宮口のコリコリした感触に背筋を震わせていた夫が、妻の哀願に後押しされて腰を振る。

「くう……絡みついてきて……チンポが凄く気持ちいい……ああああ、熱い……熱くて気持ちいい……！」

手の平を腰骨にスライドさせると強く握り、正座の体勢で妻を突く。

「ああっ、いいっ、あなた、もつと、もつと頂戴っ」

膣の中を出入りするペニスが、気持ちよさそうに脈動しているのを感じながら、妻

は夫に叫ぶ。

カリ首で、谷間の深い腔襞を擦られると腔内で快感電気がスパークし、背筋を小刻みに震えさせる。

夫の激しくなった息づかいも、男に抱かれるのを喜ぶオナナの本能を刺激して、快感を高めるスパイスになっていた。無論、愛する男性にそこまで求められる嬉しさも、拍車をかけている。

夫のペニスの円周に沿って、肉畝は冠状に広がっている。抜き差しされる度に、愛液が掻き出され、夫婦の股間とベッドシートを汚している。

又チャ又チャという粘着質の水音と男女の股間がパンパンパンひっきりなしにぶつかり合う肉の衝突音が響き渡る。

「いいわ、あなた、んんっ、素敵よお、んあああっ、いいっ、もっど、もっどお」

子宮口を一突きされる毎に子宮が揺さぶられる。暴力的でありながら、甘美な優しさに満ちた快感が、麗の頭の中まで痺れさせる。

牝の本能が美脚を動かし、快感を与えてくれる牡の腰を力二挟みする。夫の腰使いに合わせて妻の細腰も迎え腰の上下動を行い、より深い快楽を求めて心血を注ぐ。

粘い水音、肉の衝突音、熱い吐息のぶつかり合い、獣じみたあえぎ声。牡牝の淫らかな交尾音が響く中、夫が限界を告げた。

「ああっ、はあ、はあ、麗、もう出るよ……このまま中でいいだろう……!!」

「うんうん、きてあなたっ、私の中でイッて、たっぷり出してえ……!!」

妻が夫を迎えるように両手を伸ばすと、彼は前傾し、彼女が自分を抱き易いようにする。麗はそのまま幸田の背中を抱き、彼も麗の背中を抱く。

正上位で繋がりながら前半身をべったり密着させた夫婦は、再び熱いキスを交わす。顔をせわしなく左右に振りながら、唇と舌を絡ませ合い、互いの口を唾でべちよべちよにする。ふたりの股間もしぶく愛液ですっかり汚れている。

仰向けになっても崩れない八十八センチFカップの釣り鐘型巨乳は、夫の胸板に押しつぶされてぐにやぐにやにひしゃげていた。

「ああっ、膨らんで……っ、脈打ってるっ、あなたのチンポ、射精したがってる……ああっ、ああっ」

子宮口を小刻みに突き上げていた亀頭がぷっくり膨れ、竿もビクンビクン震えている。射精の予兆を感じた直後、鈴口が子宮口へズンツと嵌まり込んだ。最奥の肉に包まれる亀頭はビクビクビクビク震えた後、精液を噴出させた。

ドツプウウツツウウツツッ~~~~~!!

「あっ、ああっ、あああああ~~~~~!!」

子宮口にゼロ距離で吐き出された精液は煮え滾っていて、しかもすごぶる粘っこい。

ドクドクとポンプのように脈動する本体から次々と送り出されている。

「ああっ、熱いの出てるっ、染み込んでる〜〜〜！」

放たれる種汁は、熟れた肉ひだの谷間に入り込み、膣の内部へと浸透していく。子宮口に当たる汁も、子宮へ向かって流れ、その灼熱で子宮も灼く。

「ああ……ああ……はああああ……気持ちいいっ……」

キツく抱き合ったまま、妻は恍惚の吐息を吐いた。他の誰にも見せないオナナの幸せ顔を作っている。

隣でベッドに埋まっている夫が、荒い息をついている振動が頬に伝わってくる。彼が快感の射精をしたという実感が、妻としての満足感を味わわせた。

「はあ……はあ……はあああ……」

やがて、膣内でまだビクついているペニスを名残惜しく思いながら、妻は夫から離れた。四つん這いになり、未だ仰向けの夫を見下ろしながら、

「ごめんなさい。また、先に可愛がってもらっちゃって……今度は私が、可愛がってあげるわね」

欲情に頬を紅潮させた美顔で淫靡に微笑むと、その体勢ですり足をして後ろに下がる。

「うふふ、まだ硬いわあ……」

夫のペニスは、まだ力を失っていない。彼は結構精力が強い。それは妻の努力の賜だった。セックスで鍛えられているという面もあるが、それ以上に食べ物という内助の功が貢献している。朝食と夕食、それに愛妻弁当には精力のつく食べ物を必ず一品二品混ぜているのだ。

愛する夫に元気でいて欲しくて、そして、愛の営みで何度でも楽しんでもらい、自分も楽しませてもらえるように。

「あゝむっ……じゅるるる……あふい……かはあい……あなはああ……あいひてるわあ……んぐんぐっ……」

自分の愛液と、彼の精液塗れの逸物を淫蕩な微笑みを浮かべながらパクリと啜え込む。口腔に、精液の苦みと愛液の酸味が広がるが、欲情の化身となった人妻麗には官能を高める薪でしかない。ペニスをしゃぶる女の秘所から垂れる性汁は、精液よりも愛液の割合の方が多くなっていた。

（今夜も愛し合いましょね、あなた……）

夫婦がセックスを始めてから疲れて眠るまではおよそ一時間。今夜も、夫婦は平和な蜜の一時間を楽しむのだった。

# 第一話 友人夫婦

その日も暑い日だった。

土曜の昼過ぎ。町の中心部にあるビアガーデンの一つで麗は大学の友人と会っていた。

麗は桜色のノースリーブに薄緑色のフレアスカートという出で立ちだった。夏の日差しを受けることで、露出している手足やうなじの肌の白さが普段よりも輝いている。

上着を前に突き出す豊かな乳房や、スカートにくっつきり浮かぶ桃尻のポリウム、それに麗の気の強そうな美貌も相まって、男たちの目を引いていた。

男を誘惑するためでなく、動き易くて涼しいのでそんな格好をしている本人にとっては迷惑だったが、いちいち気にするのは疲れるので、麗は無視を決め込んでいる。

「なにしてんの？」

運ばれてきたビールとつまみに手をつけるより先に、携帯電話のカメラ機能で他の席の様子を撮影した麗へ、友人は怪訝な顔をした。

「なんでもないわ」

被写体になった席の男がシャッター音に気づいたが、それより前に麗は向き直った。

## 第二話 友人夫婦

自分たちのテーブルに運ばれていたビールや料理を撮影するポーズを取る。男は自分が撮られたのではないと納得したのか、何も言わなかった。

「おいしそうね。いただきますよう」

「そうだね……」

友人は首を傾げたが、それだけで、他の話をし始めた。

「ところで、幸田さんは仕事なの？」

「うん。休日出勤。最近、特に忙しいみたい」

目の前の友人は美月という。大学時代の同級生で、麗の夫の幸田とも知り合いだった。現在は結婚しており、左手の薬指には結婚指輪がはめられている。名字も『入巢』に変わっている。

二十七歳とは思えないほど若々しい女性だった。麗も若やかだが、美人系の彼女と違い、美月は可愛い系の女性だった。

あどけない童顔に、よく実った胸を持っている。ゆったりとしたスカートをはいていても、安産型のお尻の輪郭が浮かぶほどに尻たぶは豊満だった。

声も黄色みがかっていて、性格も明るい。キャプキャピしたトランジスタグラマーの彼女は同姓から見ても愛くるしい。性的魅力よりも子供のような可愛らしさが強いので、夫婦の夜の生活はできているのだろうか疑問に思うこともある。

「中古物件とはいえ、一国一城の主となると、休む暇もないのかも知れないね。」  
「そういうあんたのところはどうなの？ 旦那さんは何をされてる方が、まだ聞いてなかったけど。」

大学卒業以降、疎遠になっていたので麗は結婚式にも呼ばれていなかった。再会してから、彼女の夫のことはまだ聞いていない。

「うちの旦那は何を隠そう。」

クリスマスに、子供に隠していたプレゼントを渡す親みたいな顔をしながら、美月が明かそうとしたその時、

「すみませんじゃすまねーだろうがよお！」

一人の男が、店員を怒鳴りつけた。麗が撮った男だった。暑いというのに黒ずくめで、サングラスをかけている。

目元は見えないが、残りの顔の部分を見るにいかつい素顔だと知れる。あまり若そうでなく、中年に見える。肩をいからせながら、唾を飛ばして怒鳴り散らす様子は、ひどくガラが悪い。

周囲の客は眉をひそめており、中にはそそくさと勘定を済ませて出ていく者もいる。  
「お前んとこの店は、客にこんな物を出すのか！ 店長を呼んでこい！ おれは物事は白黒けじめをつけなきゃ気が済まない性格なんだ、落とし前をつけてもらうぞ。」

## 第二話 友人夫婦

指さす先には、サラダの皿があり、プチトマトやレタスの上にはえの死骸が乗っていた。

「まさかほんとにやるとは……」

麗は呆れながら携帯電話を弄り、すっくと立ち上がった。

「ちよつと、何する気なの？」

美月が小声で言ってくる。その声音は、何をするつもりなのか分かった上で制止している風にも聞こえたが、麗は無視した。

（ああいう、汚いことって本当にだいつきらい。せつかくの食べ物がまずくなるじゃない……！）

麗は、他の誰もが目を合わせようとしめない現場に、堂々と胸を張って歩いていく。

「まちなさい」

気の強そうな目に強い光を宿し、凜とした鋭い声をあげる。

「なんだ、ねーちゃん。今おれらは大事な話をしてるんだ。じゃますんじゃねーよ」

顔を向けてきた男をまっすぐに見返す麗。彼は剣呑な威圧感をぶつけてくるが、彼女は全く動じない。

視界の隅では、怒鳴られていた若い店員がすっかり青ざめて立ち尽くしている。クレームをつけている客に女性客が絡もうとしているというのに、それを止めようとも

しない。そんな余裕もないのだろう。

(だらしないわね。男なら毅然としなさい)

胸中で毒づくくと、ふたりに対して携帯電話をかざした。

「さつき、たまたま、こういうのが撮れたんだけど」

「そ、それはッ！」

喚いていた男が青くなった。かざされた画面には、彼が皿に問題の物を盛っている様子が写されていた。

麗と男のテーブルはそこそこ離れていた。普通ならば内容が不明瞭な写真しか撮れなかつたろうが、燦々と照りつける太陽が天然のフラッシュとなっていたお陰で、男がしている様子が分かるくらいの写真にはなっている。

「こういうのって犯罪よ？ 名誉毀損、恐喝、業務妨害。他にもあつたかしら。白黒つけなきゃ気が済まない性格とか言ってたけど、お巡りさん呼んで、裁判所で罪状を確定してもらつとく？」

男の顔がみるみる赤くなつていく。屈辱とも怒りともつかない顔色だったが、周囲の視線に気づいて顔を強ばらせた。

知らぬ振りを決め込んでいた他の客は、今や明確にひややかな視線を送っていた。すっかり青くなっていた店員も、挑むように男を見ている。

## 第二話 友人夫婦

「ふ、ふんっ！」

財布からお金を取り出し、テーブルの会計伝票の上にドンッ！と置くと男は逃げるように去っていった。

「あ、ありがとうございます……」

「いいえ」

金額と伝票を確認すると、恩人を見る目で店員が礼を言ってきた。麗はそっけなく返事をする、踵を返した。

「おつかね。決定的瞬間を撮ってたんだね」

「ええ。偶然見つけて、こんなことになりそうだと思って撮ってたんだけど、まさか本当に使うとは思わなかったわ」

テーブルに戻ると、美月が好奇的な眼差しを向けながら手を出してきた。意図を察して携帯電話を渡してやる。

「今あるのを平らげたら、お店変えましようか。あんなのを見せられたから、何だかビールも料理も味がよく分からなくなりそう」

「んー、結構よく撮れてるねー。これ解像度いくらなんだろう……え？　なんか言っただ？」

写メをしげしげ見ている友人に、麗はため息をついた。

「何でもない。もうどうでもよくなつたから」

投げやりに返事をする、皿の上のフランクフルトにフォークを突き刺し、かぶりつく。

口内で肉汁がじゅわつと広がり、香ばしい風味が鼻を抜けていく。ぷりぷりした歯ごたえとよく合っていて、なかなか美味しいとは思うのだが、先ほどのつまらない出来事の影響からか屈託なく味を楽しめない。

そこへ、何人かの店員が注文していない料理を運んできた。

「ちよつと、そんなの頼んでないわよ？」

「いえ、店長がお客様にと」

「店長？」

「あ、キョウウちゃん、おーい」

美月がパタパタと手を振った。

「初めまして、麗さんですね。妻がお世話になっております。先ほども、ご苦勞をかけて申し訳ありませんでした」

店へと続く出入り口からやってきたスーツの男性が慇懃に頭を下げた。

歳は三十前後だろうか。野生的な顔立ちのハンサムだった。背が高くてガツシリした体型をしており、スーツ姿の運動選手にも見える。グレイのスーツは一目で上等だ

## 第二話 友人夫婦

と分かる物で、彼はそつなく着込なしていた。左手首の腕時計も足の革靴も高級そうだった。

「この人がうちの旦那様の京一郎さんでえ、ここは彼が経営するお店の一つなの」  
美月が自慢げに説明してくる。

「それはすごい。旦那さん、まだお若いのに」

「いえいえ、とんでもない。それより、そちらの品物は、妻のご友人へのささやかなプレゼントであり、先ほどのことへの微細な謝辞です。どうぞお受け取りください」

「……そういうことなら、遠慮なくいただきますね」

（そこまで言われて断るのも、大人げないし）

胸がムカムカしたので勝手にやったことなので、礼をされる気分でもなかったが、そう結論づけて麗は運ばれてきた物に箸をつける。適当に褒めると、彼は満足そうな顔をした。

「麗さんは妻の話から想像していたよりもずっとお綺麗なのですね。妻と一緒に撮ってらした大学時代の写真を拝見させてもらったことがあります、いつそう美人でいらつしやる」

「いえ、そんなことは」

（普通、初対面でこんなに褒めちぎってくるかしら。なれなれしく名前呼びだし。し

かも妻の目の前なのに。社長だかオーナーだかよく分からないけど、見た目に反して軽い性格……無神経なのかしら)

そんなことを思いながら無難に返事をしつつ、箸を進める麗。夫ならともかく、いかに社会的成功を収めているハンサムに褒められても、あまり心は震えない。

「特にそのお肌……恥ずかしながら、家内も相当の美肌と思っっていますが、奥様の肌はさらに美しい……素晴らしいです」

自慢の肌に言及されても、大仰だな、という感想しかなかった。

ちらりと美月をみると、夫が他の女を褒めそやしているのには無頓着で、麗が撮った例の画像を眺めながら、好き勝手にビールと料理を口に行っている。気分を害している風には見えなかった。

(まあ、美月がいいならいいんだけど)

出された料理を片づけたら店を出ようと思いつつ、麗は友人の夫の相手をし続けた。彼の肌を見る目が、異常にギラついていたことに気づかずに。

「んんう………あ、あれ? ……私、どうして家で寝ていたのかしら」

翌日。目覚めた麗は周囲の様子を見て怪訝な顔をした。自分でベッドに潜り込んだ記憶がないのだ。

## 第二話 友人夫婦

目覚めた場所は自宅の自分の部屋だった。大抵は夫婦の寝室で夫と一緒にベッドで寝ているのだが、どちらかが過度に疲れている場合など、一人で寝た方がいいと思つた時や、一人になりたい時のために、ふたりは個別に部屋を持っている。

「えと……ひよつとして酔っ払って帰ってきてそのまま寝ちゃつたのかしら」

上着の裾が乱れているが、着ているのは出かけた時の服だった。身体は自分で分かるくらいに酒臭い。二日酔いこそしていないが、記憶は曖昧で、どうやって帰ってきたのかも思い出せない。

「まあいいわ。幸田さんに聞こう。多分、帰ってるわよね……ああ、でも本当に酔つてそのまま寝たんなら、私、主婦の仕事をしてなかつたってことになるわよね」

優しい夫が一度くらいの食事や入浴の不準備を咎めるとは思えないが、妻としては罪悪感を感じる。

麗はそんなことを考えながら、寝ぼけた頭を覚まして酒臭さを取ろうと思ひ、タンズから着替えを出して浴室に向かった。

脱衣籠に服を入れ、一番上に着替えを置く。裸になって浴室に入り、温水の蛇口を捻つた。

「ああ……いいお湯……」

天井近くから注いでくるシャワーは心地よく、目が一気に覚めていく。

だが、壁掛け鏡を見て絶句した。

「なによこれ……!」

右乳房の側面に、模様が書き込まれていたのだ。苺みたいな物で彩色までされている。

「やだ……気持ち悪い……」

可愛らしい意匠だが、麗にとっては自慢の美肌を汚す穢らわしい染みでしかなかった。

「なんでこんな……嘘でしょ……!」

スポンジにたつぷりボディソープをまぶして、泣きそうな顔でゴシゴシ擦る。だが、模様は全然消えない。色あせもしない。

「冗談じゃないわ、こんなのがついてる身体なんてあの人に見せられないっ」

乳房に描かれた模様は、ぱっと見タトゥーにも見える。真面目な幸田は、けばけばしい化粧をしている若い娘に眉をひそめるタイプなので、妻がこんなものをつけていると知れば、失望するかも知れない。

愛する夫に嫌われたくないという思いが、麗を駆り立てる。しかし、肌がヒリヒリするほど擦っても、結果は変わらなかった。

「どうしよう……どうして、こんなのがつけてるのよ……」

## 第二話 友人夫婦

横柄な男にもまったく動じなかった人妻が、途方に暮れた子供のような顔を浮かべる。注がれ続ける心地よかったシャワーも、今では容赦なく自分を打ち据えてくる鉄棒みたいに感じられた。

数十分も頑張ったが、結局模様は消えなかった。ひとまず諦めた麗は身支度を整えて朝食の準備にかかった。

普段なら、家の中ではハーフカップブラとキャミソールと短パンというラフな格好をする麗だが、今日ばかりは上はフルカップブラと長袖シャツを選んだ。どちらも色が濃く、濡れても透けない素材であるので、例の模様はまず見えない。

だが、頭ではそう分かっていても、外からは丸見えなのではないかという不安が付きまとった。夫に知られれば、嫌われるという恐れがそう思わせていた。

「おはよう、麗」

ダイニングにいた妻に、後ろから夫が声をかける。

「ひいっ……あ……あ、おはようあなた」

愛する夫から、何度となく言われてきた朝の挨拶を言われたただけだというのに、過敏になった麗は飛び上がりそうになった。

「どうしたんだい？　なんだか酷く驚いている風だけど」

「う、ううん、何でもないの……それより、昨日はごめんなさいね。私、酔っ払って

帰ってきて、休日出勤して疲れてきたあなたのお世話をろくにしなかったでしょ？」

取り繕うように始め、すまなそうに締めくくった妻に、夫は首を振った。

「いや、たまには羽目を外すのもいいと思うよ。ただ、美月さんと旦那さんには、送らせてしまつて悪かつたけど」

(送らせて悪かつた？ ……あれ…私、一人で帰ってきたんじゃないの？)

「美月とあの子の旦那さんが、私を送ってきてくれたの？ 私が、一人で帰ってきたんじゃない？」

「うん。麗は酔つて寝ていたから覚えてないんだろうけど、ふたりが連れてきてくれたんだよ。そうそう」

夫は思い出したようにズボンのポケットをまさぐり、一枚の名刺を取り出した。

「これ、旦那さんがキミにつて。酔つてて失くしそうだったから、しらふになるまでぼくが預かつてた」

(名刺……?)

何か違和感を感じる。しかし、考えても理由は分からない。取り敢えずは名刺を受け取り上着のポケットに入れた。

「ところで、朝ごはんできてる？」

「え、ええ……今朝はね……」

## 第二話 友人夫婦

麗は夫の朝食の世話をする。乳房の模様と名刺に感じた違和感のせいで、楽しいはずの夫との時間も麗はそぞろに過ごしてしまう。夫は時々訝しげな表情を浮かべたが、何かあれば言ってくれると信頼しているのか、特に追究しようとはしなかった。

後片付けや諸々の家事を済ませると、麗は自室に戻った。朝食時には分からなかったことも、家事をしているうちに段々と分かってきたのだ。

「やっぱり、この名刺が鍵よね。正確には、美月とその旦那だろうけど」

彼女らが送り届けてくれたということは、あのビアガーデンから帰宅するまでの間は、ずっとふたりといたと考えるべきだろう。

そして、名刺だ。美月とは連絡先を交換し合っているのに、旦那の携帯電話の番号まで記された名刺をわざわざ渡してくるということは、麗がこのように困ることを見越している、俺に連絡してこいというサインではないだろうか？

「思い違いで、やっぱり無関係だったっていうのでも、困ることはないし……試して損はないわよね」

ひよつとしたら、この模様を消す手がかりを掴めるかも知れないと、藁をも掴む気持ちで携帯電話をプッシュする。機械油の汚れさえ落とす洗剤を使っても模様が落ちなかった今、他に解決策は考え付かない。

このまま一生、夫に肌を見せられないと思うだけでゾツとするし、見せて嫌われの

も身体が一気に寒くなるほど恐ろしい。

三回目のコールで相手が出た。自分の名前を告げると、相手は弾んだ声でこう言った。

「奥さんからの連絡を待ってましたよ。用件は、おっぱいのタトウーのことですね」

「あなたなの!?! 私にこんなを描いたのは!」

「おっと、声が大きいですよ。旦那さんは近くにいないんですか?」

怒声を浴びせられても飄々としていることに、馬鹿にされている気がして更に怒りが湧いたが、幸田に聞かれていい内容でもない。はらわたの煮えくり返る思いを押し殺し、声音を下げる。

「……どうなんです、あなたなんですか、私にこんな落書きをしたのは」

「落書きというよりタトウーなんですがね」

「タトウーって刺青でしょ? なら、もう一生取れないのこれは……!」

目の前が真っ暗になる。ならばもう、夫と夜の営みをすることはできないのではないのか? 身体に彫り物をしたと分かったら、離婚届を突きつけられるかも知れない。

他の誰に嫌われてもいいが、愛する夫だけには麗は突き放されたくはないのだ。

「肌に彫るタイプでなく、転写式の……まあ、シールみたいなものなので、割と簡単に落ちますよ。彫る場合でも、なんとかならないわけじゃないですしね」

## 第二話 友人夫婦

「本当に？ 元に戻るのね？ ……でも、シールみたいな物と言う割には、お湯や石鹸や洗剤では落ちなかつたわよ？ それに、肌と一体化しているみたいで……」

「簡単に落ちるといふのは特殊な薬品を使えばの話で、石鹸とかで擦るとしたら、奥さんのキレイなおっぱいが真っ赤になるまでやっても無駄でしょうねえ」

電話の向こうの男の声が、段々と下卑たものになっている。

「なら、その特殊な薬品といふのを分けてくれるかしら。できるだけ早く。お金は払いますから。ダメなら、こういうもので、こういう成分が含まれているかだけ教えて頂戴。あとは薬局で探すから」

「ブツはもちろん持ってますよ。成分とかも教えてもいいですが、かなり特別な物なので、その辺の薬局じゃまず手に入りませんでしょうね」

「だったら、やっぱりそれをもらえる？ 本当に、できるだけお金を払うから」

懇願する声は、麗自身が驚くくらいに切羽詰まっていた。

そんな彼女への返答は、獲物がまんまと罠にはまったことに小躍りする猟師のような声でされた。

「いいですよ。なら、これから言う場所に今から来てもらえますか。ただ、金はいりませんので、手ぶらでどうぞ。それじゃ、待ってます」

男は電話を切った。

「指定場所に来い……金はいらぬ……これって、どう考えてもおかしいわよね」  
嫌な予感しかしないが、肌の模様を取り除く手段が他にないなら行くしかない。

「こっちは素性も連絡先も分かっているんだし、社会的な地位がある人でもあるんだし、大丈夫よね……」

自分を納得させるようにひとりごち、麗は出かける支度をした。万が一遅くなってもいいように、夫の昼食と夕飯の用意をして、行き先を告げて家を出る。念のために、知っている限りの入巢夫婦の情報をメモした紙を自室のベッドの枕元に置いておいた。

晴天の中を歩く麗の背後から、黒い雲が近づいていた。

約束の場所は駅前だった。

休日で人がごった返す中、麗と京一郎が対面する。

「来てくれて嬉しいですよ奥さん。今日もおキレイですね」

昨日と同じスーツ姿で、彼がなれなれしく言ってくる。

「それより、薬をいただけますか？」

麗はそっけない。自分を苦しめた張本人に、愛想よくする余裕は今の彼女には全然ない。それに何より、必要なものを取りにきただけなのだ。他愛ないお喋りに付き合うつもりは毛頭なかった。

## 第二話 友人夫婦

そんな態度に、京一郎は肩をすくめた。

「ここにはありません。ある場所に保管してありますね。」足労をお掛けしますが、ついてきてもらえますか？」

呼び出しておいて持つてきていないとうそぶく様子に、不信感を益々つよらせる麗だったが、拒否することはできないので大人しくついていく。

注意深く相手を観察し、おかしいことをされればすぐに対応できるよう、身構えつつ、頭の中では持参したハンドバッグで殴りつけるイメージトレーニングをしながら、連れて行かれた先は、歩いて十分ほどのところにある高級ホテルだった。入ったのはかなり上の方の階で、料金は並みではないだろう。しかし、彼は自分の庭のようにごくごく自然にホテルのエントランスをくぐり、エレベータに乗り、廊下を歩いて部屋に入った。

「さあ、どうぞ奥さん。お求めの物はこの中です」

どう考えてもやはりおかしかった。模様一つ落とす薬を渡すのに、どうしてこんなホテルの部屋にまでくる必要があるのだろうか？

しかし、これからも夫と幸せに暮らすには、薬は絶対に必要だった。どんなに異常だと思っても、従うほかない。

ガチャリ……。

背後でオートロックが働き、施錠される。心臓にまで響く重くて不快な音だった。「どこにあるんですか。こんなところまで連れ出して、どういうつもりなんです？」室内は広がった。十畳は軽く越えているだろう。部屋の中央に大人数人が川になって寝れる大きなベッドが置かれている。空色のシーツと布団は、清潔感に溢れてピカピカで目が痛いくらい。向こう側には駅前を一望できる大きな窓があり、内装も落ち着いた雰囲気だった。

「薬は、この通りここにあります」

麗に向き合う格好でベッドのへりに腰掛けると、京一郎は懐から小さな小瓶を取り出して枕元に置いた。

「ちよつと、最初から持っていたんじゃないの！」

「その通り。奥さんとこうしてふたりきりになりたかったので、嘘をつかせてもらっただんです」

彼女の剣幕にもまったく動じず、いけしゃあしゃあと彼は言い放つ。

「いやはや、お硬そうな人妻だと思いましたが、友人の夫とはいえ、ほとんど面識のない男にホテルまでついてくるとは驚きです……………もしかして、期待してました？不倫とか……………」

「ふざけないで！ 誰が不倫なんか……………私はただ、胸のあれを消す薬が欲しかっただ

けなのよ。その薬をもらったら、すぐにでもここを出て行くわ」

本気だと伝わったのか、京一郎が神妙な顔になる。心外だという雰囲気を滲ませて口を開いた。

「そんなにこれが欲しいので？ あれ、そんなに気に入らませんでした？ 結構可愛いものを選んだつもりだったんですがね。奥さんの美肌にもそれなりにマッチしていたでしょうに」

「冗談じゃないわ。あんなものが胸にある内は、夫とまともに顔を合わせることもできない……本当に迷惑してるの、だから早くそれをよこして！」

「ふむ……なら、この薬と引き換えに奥さんを抱かせてもらえませんか。もう気付いているかと思いますが、実はそれが狙いなんですよ。奥さんを一目見た時から、セックスしたくて堪らなかつたんですよねえ」

下卑た笑みを浮かべ、麗が欲しくて堪らない小瓶を弄びながら言ってきた。

（やつぱりそういうことだったのね……）

内心で歯噛みする麗。胸に模様をつけたのは、こうして弱みを握るためだったのだろう。自分と幸田の性格を妻の美月から聞いていれば、容易に思いつく作戦だ。

酒で酔わせて眠らせて、シールみたいな物だというあの模様をつけたのだらう。

どれくらい酒を飲んだのかを思い出してみても、記憶がとんでいる以前に飲んだ量

で酔いつぶれるとも思えないので、ひよつとしたら睡眠薬か何かを使った可能性もある。そこまでしたかも知れない卑劣漢なのだ。目の前の男は。

夫以外の、よりによつてこんな最低の男に抱かれるなど考えただけでも怖気を覚えるが、胸の模様を消さない限りは幸せな夫婦生活は戻ってこない。

(くう……返事は分かつてゐるって顔で余裕ぶつて……！)

脅迫者は、ニヤニヤしながら苦悩する麗を眺めている。自分のしたことに罪悪感や後悔を感じている様子は微塵もない。猫が鼠を甚振るように、酷薄さと好色さを宿した瞳でこちらを見据えている。

(あなた……ごめんなさい……でも、私が愛しているのはあなただけだから……どうか、今回だけは許して)

「分かつたわ……気の済むまで私の身体を好きにすればいい」

身体は汚されても心は許さない。その強い心を視線に乗せて、麗は下衆な男を睨みつけながら承諾の言葉を吐く。それだけでも、一言ごとに肺が重く痛む苦行だった。

「ふふ、物分かりがよくて助かりますよ」

しかし、京一郎はまったく気圧されず、苦悶する麗を気につけない。苦勞の末に高嶺の花を掴んだみたいに、嬉しそうな笑みを貼り付かせて近づいてくる。

「でも、こんなことをして美月が哀しむんじゃない？ あなたも妻を持つ身なら、彼

## 第二話 友人夫婦

女のことを少しは考えたらどうなの？」

人妻を脅迫する男がその程度でたじろぐとも思わなかったが、少しでも相手に反撃したくて麗は言い放った。

「あの子のことですか……それなら、心配は無用ですよ。そうだろ、美月！」

声を張り上げて妻の名前を呼ぶと、壁をくりぬいて作られたクローゼットの中から美月が現れた。

「なっ……！」

麗は絶句した。友人の姿が尋常ではなかったのだ。

顔には黒いアイマスクをし、ピンク色のギャグボールを咥えていた。身に付けるものはコルセットみたいなしザーのボンテージ。下半身は黒のガーターベルトとストッキングのみだった。手は後ろで縛られている。

愛くるしい童顔の頬は熟したトマトのように紅潮しきり、ギャグボールを咥える口の端からはだらだらと唾液が落ちてきている。額やこめかみには汗が浮かんでおり、セミロングのソバージュが幾本も貼り付いていた。

上半身では細い撫で肩が剥き出しで、コルセットタイプのボンテージの上ではたっぷりとした乳房が鎮座している。垂直に垂れる釣り鐘型で乳肌が顔と同じく上気している。正面を向く乳輪と乳首は、使い込んだように黒ずんだ鴉色だった。

乳房には蝶などの模様が描かれており、綺麗な乳肌に奇妙な色気を付加していた。外気に晒された無毛の股間では、幼げな外見とは裏腹に見事に熟れた肉花卉が咲いていた。ヒクヒクと開閉しながら愛液をポタポタ垂らしている。胴底はもとより、太腿の付け根からストッキングにかけての範囲がぐっしょり濡れている。

身体を自由を奪われ、惨めな格好をしているというのに、友人は性的に興奮していた。性とは無縁そうな娘で、子作りもできないのではないかと思っていたのに、今目の前にいる彼女は、見知らぬ娼婦とも筋金入りのスキモノともつかない、とにかく淫らで汚らわしい生き物にしか見えなかった。

「美月、俺はこれから麗さんと不倫するが、構わないな？」

京一郎の口調が、段々粗野になってきていた。やり口を考えれば、慇懃な喋り方よりもこちらの方が似合っている。本性を現してきたのだろう。

ストレートな言い方は、これからすることを麗に思い知らせると同時に、そのことを他人、しかも友人に知られる恥辱を味わわせた。

親しい友だちの異常な姿に我を忘れていた麗だったが、彼の台詞でハツとした。だが、美月の反応にまたもや声を失った。

彼女は、コクコクと何度も頷いたのだ。

「ご覧の通りです奥さん。家内は認めてくれます。俺たちは、妻公認で不倫ができ

るわけですよ」

「信じられないわ。夫の不倫を認めるなんて……分かった、DVでしょ。あんな格好をさせて、美月を脅してるんでしょ、私みたいに……！」

「DVだなんて心外ですね。俺は、美月を愛しはしても、暴力なんか振るいませんよ。考えただけで気分が悪くなる」

京一郎は、口にするのも嫌だという風に顔をしかめたが、すぐに元の顔に戻って続けた。

「あれは、美月の性癖なんですよ。ああいう風に苛められるのが彼女は大好きなんです。俺がそれを見抜いて、楽しませてやってるんです。他人から見れば奇異に映るでしょうが、これも愛情表現のひとつなんですよ奥さん」

彼の言葉に、美月はまたコクコク頷いた。その様子には、脅えている様子は見受けられない。心の底から首肯している風にしが見えなかった。何しろ、頷いている間も、愛液がポタポタ落ちていて、床の染みを大きくしているのだから。

ギャグボールを噛む口から、フシューフシューと続けられる呼吸音や鼻息も、聞いているだけで淫らな気持ちにさせる淫靡さを滲ませている。

(私……どうなってしまふの……)

何一つまともなことがないこの部屋で、自分はこれから何をされるのか。

染められ奥さん

ただ身体を好きにされることよりも、もっと恐ろしいことになるのではないだろうか。

そんな漠然とした恐怖に、麗は底なし沼にはまりこんでいる錯覚を覚えた。

## 第二話 染みを消すために

「むふうう……んふううううう……ふしゅくふんっん……」

京一郎の隣に腰掛けた美月が、喜悦の呻きをあげている。彼女のぐしょ濡れの秘部には夫の指が入っており、Gスポットを押し込むように捏ねられている。

小さで淫らな裸身が背中からビクビク震え、指を咥え込んだ秘裂からは間欠泉のように愛液がしぶく。

惨めで不自由な格好であるというのに、性とは無縁そうな女友達が、これ以上ないくらい痴態を晒していた。

彼女がみじろぎする度に、身体に書かれた文字や模様もくねり、卑猥さをいつそう際立たせている。

（私はそうはならないわ……愛するあの人でない男に身体を許しても……そこまで落ちぶれない……！）

目の前で美月を嬲るのは、麗もこうしてやるとの意思表示なのだろう。

変態に墮とされた友人を見ると戦慄と嫌悪感を覚えるが、それだけだ。羨ましいとか、自分もあなりたいなどとはまったく思わない。

（すべての女が自分の思い通りになると思ったら大間違いよ）

友人を墮落させた男を、心の中で侮蔑する。と、

「では奥さん、始めましょうか。まずは裸になってください」

指一本で妻をよがらせながら、京一郎が傲然と言い放つ。胸に描かれた汚らしい模様を消すには言うことを聞くしかないので、麗は奥歯を噛みしめながら忍従する。

下劣な男を見返す麗の目が、無意識の内に睨みになってしまっているが、彼は頓着しない。小動物が健気に抵抗している様子を嗜虐的に見ているような目をして、受け流している。

（どこまでも馬鹿にして……！）

こみ上げる怒りを必死にこらえながら、麗は脱衣した。見ているのが夫であれば、男の欲望を刺激するように淫らに脱ぐところだが、京一郎にそんなサービスを行う理由は一つもない。自宅の脱衣所で脱ぐよりも乱雑に服を脱ぎ捨てた。

京一郎は苦笑したがそれだけだった。人妻の裸体を凝視した後、命令してくる。

「ふふ……やはり奥さんの肌は美しい……もちろん、プロポーションも見事ですが、俺は美肌が大好きでしてね。もつと近くにきて、よく見せてください」

逆らえない麗は、彼のメートル前まで進み出た。

すると京一郎は枕元にあったりモコンで、部屋の照明を点けた。部屋に太陽が出現

### 第三話 染みを消すために

したと錯覚させるほどの、煌々とした明かりが室内を満たし、全裸の人妻を照らす。  
（こんなに明るくなって隅々まで丸見えじゃない……ああ、いやらしい目で見てる……こんな汚い男に……私の肌と身体が……あの人に喜んでもらうために磨いてきた肌と身体が……）

「手は頭の後ろで組んで、足はガニ股に開いてください。奥さんのいやらしい身体の隅々までよく見えるようにね」

（くう……こんな恥ずかしい格好……）

麗は唇を噛みながら、油の切れた機械みたいなギコチなさで命令に従う。

羞恥と屈辱で身体がカアツと熱くなり、目の前が真っ白になって目眩まで襲ってくる。

「ふふふ、そうそう。いい格好です……ああ、見れば見るほどいい身体だ……」

勝ち気そうな美貌の人妻が作る、悔しそうな表情。鎖骨の下から延びる乳肌が形作る、八十八センチFカップの釣り鐘型巨乳。五十八センチの括れたウエストが、いつそう量感を感じさせ、手を後頭部で組んでいるので肉房の突き出しぶりが卑猥になっている。反対側を向き合う、ほどよい大きさの乳輪と乳首は、乙女のそのような鶉色をしていた。

ほっそりした太腿の長い美脚は下品なガニ股の体勢になり、股間は丸見えになっている。肉花卉は愛する夫との蜜時により鍛え上げられていて、唇のように肥厚してい

る。熟した性器の常で、ガニ股を強いられていることもあり、内部のバラ色粘膜も顔を出している。

そこは膣内を満たす愛液に塗れて飴色のツヤを帯びていた。強固な貞操観念を持つ麗の精神とは裏腹に、まるで目の前の男を誘うように節操なく断続的にヒクついている。

（恥ずかしい……見ていただけでなく、はやく何かしなさいよ……ああ……）

京一郎の視線は粘つくく、熱く、強い。視姦という言葉を意識しないではいられなかった。

触られてもいないのに、見られている部分に奇妙な圧迫感を感じる。視線が動けば、その通りになぞられている感触を覚えて、まるで愛撫でもされているかのようだった。彼の目がいくところは、本当に触れられているかのように熱を持ち、ピリピリとしたむず痒さも感じてしまう。

（やだ……私どうしたの……こんなことって……）

みつともない格好を強要される屈辱や恥辱が、心に染み込んでくるような妖しい快感に変わってきている気さえする。

（気を確かに持つの……私は、酷いことをされているのよ……！）

正気からの叱咤を受け、顔に滲む悔しさの色がいつそう深まる。だが、その頬は仄

### 第三話 染みを消すために

かに上気し始めていた。

その変化に気づいて面白がっているのか、京一郎が野卑なニヤニヤ笑いを浮かべている。

「奥さん、もっとこっちへ寄ってください。そのいやらしい釣り鐘おっぱいを俺の顔にくつつけて。そうそう、体勢はそのままですよ。ガニ股ですり足しながら近づいてください」

ガニ股ですり足をしろとの命令をことさら強調してくる。

「つつ……調子にのって……これでいいのっ」

カニが縦に歩いてきたらこんな風になるだろうという歩行で、麗は男に近づく。

「こんなに近づいて見ると、本当にきめ細かくて滑らかだと分かりますよ……はあ……綺麗なあ……ペろ」

「ひいああっ、な、何を……!!」

「ただ舐めただけですよ。おっと、手は頭の後ろで足はガニ股ですよ。崩したら、約束違反とみなして、薬を床にぶちまけます」

「つつつつ……分かってるわ……うあああっ、やだ……こんな男の舌が私の胸に……つつつつ……」

京一郎は自分がつけた胸の模様を舐めてくる。厚く広い舌肉にたっぷりと唾液を絡

ませて、れるるるん、と撫で上げる。

(やだあ……舌のザラザラが胸の肌を擦って……ああ、ぬるぬるで……)

夫でもない男の舌の体温が人妻の胸肌に染み込み、ぬめる舌全体で舐め上げてくる  
感触が乳房に刻まれる。

心は嫌悪感と汚辱感でいっぱいだが、背筋に妖しい寒気が走る。胸の鼓動が徐々に  
早くなり、舐められている箇所からぼうつと火照ってきている。徐々に吐息に熱がこ  
もり始める。

「ふふふ……乳首が勃起してきましたよ。感じてるんですね……気持ちいいって思っ  
てるんだな、奥さん」

口調が粗野になってきた。声には勝ち誇った響きもある。

「そんなことあるわけないわ……っつっ、こんなの気持ち悪いだけ……ああ……」

(いや……私の身体……だんだんおかしく……こんな男で感じるなんてだめなのに  
……ふあああ……)

模様を舐める京一郎の目の前で、麗の乳首はにきよきよと大きくなっている。そ  
の身を赤熱させ、男を知る女なら勃起ペニスを連想させる硬い見た目を見せつけてい  
る。

「おいしそうな乳首だな……俺は肌も大好きだが、乳首も大好きだ……処女みたいな

### 第三話 染みを消すために

色をしてるが、旦那は舐めたり吸ったりしないのか？」

「そ、そんなことあなたに関係ないでしょっ」

実際は、麗の夫も乳首には興味を示している。赤ん坊のようにしゃぶることも多々あり、妻もそうされることが好きだった。乳首の快感だけでなく、明け透けな態度をとられると愛されている実感が湧くからだ。

そんな風に使い込まれていても、体質からか麗の乳首は初々しい色を保ち続けている。

「ふうん……まあいい。どっちにしろ、いただくからな」

（こんな男に乳首まで……あの人専用の私の乳首が……くうう、でも逆らえない……逆らったら薬が……）

「い……やあ……唇が近づいてくる……あっ、ああ、んああああ……」

夫にだけ許している乳首が、下劣な男に奪われてしまった。唇で乳首の根本から啜え込み、口内に突き出てきた先っぽに唾液をたっぷり浴びせてくる。そして、尖らせた舌先で往復ビンタさながらに、上下左右に倒してくる。

「むふふ、ちゅぱ、おくはんのひくび……むちゅっ、あまふてかたふておいひいな……れろれろれろ……」

「いやああ……乳首っ、あああっ……んんっあああ！」

先端が倒される度に、根本にじゅんとした重い快感が走る。それは乳房の内部にまで浸透し、微熱となって胸全体に拡散している。

片方の胸が放置されているだけに、快感も微熱も際だって感じられて無視できない。  
（ああああ……みてる……乳首を責め立てながら、はしたない声を出してる私を上目遣いで見てる……っ）

京一郎は、巧みに乳首を責めながら卑劣な男の手で嬌声を上げさせられている人妻を、時々得意げに見上げていた。

目が合うと目だけで勝ち誇った笑みを浮かべ、麗が悔しさからあえぎを我慢しようとする、責めを激しくして快感で蹴り飛ばしてあえがせる。

（こんな男に感じて……その上、感じてる顔を見られるなんて……悔しい……ッ）

「ちゅぽんっ。くくく……奥さんの乳首、もう俺の口の味を覚えてくれたかな？ どうだい、もっとすごいことをしてやるうか」

あんたが感じてることなどお見通しだと言わんばかりに、誘惑してくる卑劣漢。

「馬鹿にしないで……こんなのだうってこと、っうん……はあ、はあ……ないわっ

……早く、こんなのはすませてしまっ……あの人私の帰りを待ってるんだから

……ああっ」

「ふふ、そうこなくっちゃな。おい美月、お前も手伝え。お前の強情な友達を、素直

### 第三話 染みを消すために

にさせてやるんだ」

空いてる手を伸ばし、京一郎は美月の手の拘束を解いた。すると彼女は自分のアイマスクとギャグボールを自分で外し、夫へしなだれかかった。

「うん……わはっ……あははは、うまふしゃべへないは」

ずっとギャグボールを噛んでいたせいで、顎が痺れて上手くしゃべれないらしい。口を閉じること難しいようで、溜まった涎をだらだら垂らしている。

（美月……あんなにみつともないのに、本当に嫌じゃないのね……）

長い間拘束されていたというのに、彼女はそれをした夫を咎める素振りをまったく見せていない。それどころか、セックス経験豊富な麗もぞくりとするほどの艶っぽい雰囲気漂わせている。

「涎だらだらでしょうがねえな。ぶちゅっ……ごくごくごく……」

可愛がっている飼犬を見るように見た後、夫は妻の唇にかぶりついた。頬をもごもごさせながら、喉を何度も大きく鳴らす。

彼女の唾液を飲み下しているのだろう。美月はうつとりしながら身を委ねる。少しすると顎の力が戻ったのか、彼女も頬を動かして細い喉をうごめかせた。

ふたりの鼻息と唾の嚙下音が部屋を満たす。時々、美月は麗に流し目を送ってきた。上級の牡を独占しているという優越感に満ちたまなざしで、麗は見下されている気が

してならなかった。

（あの美月が……そんな目で……別に私はうらやましくなんか……）

そう思うが、ふたりのキスから何故か目が離せない。ほったらかしにされている乳首に、しゃぶられている感触が蘇り、責められていた時に感じた乳悦までもが再生される。こびりつく熱を失った唾液が、乳首をいやに冷え冷えと感じさせ、口に含まれる温かさを懐かしがらせる。

「ちゅぱっ……美月、顎はもういいな？」

「うん、大丈夫」

自分の唇の周りに付着した夫の唾液を、小さな舌で舐めながら美月は答えた。

「なら、お前はそつちをやれ。俺はこつちをやる」

「え……？」

麗には意味が分からなかったが、美月は勢いよく頷いて彼女に艶然とした笑みを向けた。

「麗ちゃん。たくさん、気持ちよくしてあげるね」

「なにお……ああっ……ちよつと美つ　ンンツ……そんな……両方なんて……！」

京一郎と美月は、それぞれひとつずつ乳首をしゃぶる。美月の舐め回しも、セックスを知る女ならではのねちっこさで、夫と共に容赦なく麗を昂らせてくる。

### 第三話 染みを消すために

片側だけでもあえがされたというのに、同等の技巧で両方を責められては、貞淑な人妻も大いに感じさせられてしまう。

ふたりは最初思い思いにしゃぶってきたが、やがて横目でアイコンタクトをとり、息を合わせてきた。

舌のざらつきで、下から上に上から下へとヤスリがけしてくる。かと思えば、尖らせた舌先で乳頭のとっぺんをほじってきもする。力加減も速度もほとんど同じで、麗に与えられる乳悦は責め手が京一郎だけだった時よりもずっと大きい。

責められる左右の乳首は燃え上がり、乳房も内側から煮え滾ってくる。乳首を起点に豊胸の中に染み込んでくる快感は、内部全部に焼け付いてくる甘美感で、鼓動がどんどん早くなる。

乳房がパンパンに張りつめ、微細な玉の汗が肌から滲み出でてきた。快感で麗がみじろぎすると、その拍子に汗同士がぶつかり合って膜になる。煌々と照らしてくる室内照明が、汗の膜がかかった乳肌をキラキラと輝かせる。

息が詰まるが、それも苦痛ではなく甘ったるい快美で、乳悦と相乗効果を起こして麗を発情させた。

「んんっ……あああっ、そんな……ふたりがかりでそんなことされたら……ふあああっ、だめっ、だめえ……」

勝ち気な目がしどけなく弛み、半開きの口からは甘ったるい嬌声が断続的にほとばしる。

卑怯な男に屈服するものかと意志を張りつめていた貞淑な人妻が、熱く湿った吐息をこぼす。

「くつくつくつ、大分感じてるようだが奥さん……まだ、気持ちよくなってるって言い張る気かい？」

「くうううううううつ、ああつ、あつ、はあはあ……わ、私は……んああああ」快感にあえぐ姿を見せてしまっている以上、それは惨めな虚勢だとは分かっていたが、それでも愛する夫を持つ妻としての矜持から麗は快楽を否定しようとした。

しかし、必死に意志をかき集めて否定の言葉を口にしようとしても、でてくるのは甘いあえぎ声で、感じていない！ など肝心のことがなかなか言えない。

「格好つけても無駄だぜ。ほうら、これはなんだ？」

「な、なんだですって？ ……ひゃううううつ、いやつ、それは……あああ、そんなところの汁を……あああつ」

京一郎は意地っ張りの人妻の股間に人差し指を這わせ、一掬いすると彼女の目の前に持ってきた。親指と人差し指でオーケーサインを作り、そして広げる。

麗の目に、離れた指の腹同士が粘っこい糸で結ばれている光景が飛び込んできた。

### 第三話 染みを消すために

愛液の糸だ。一掬いだつたはずなのに、指はしとどに塗れている。鼻先でされているせいで、愛液の生々しい臭いが鼻腔を突いてきた。

「ほら、こんなにいやらしい汁を出してるのに、まだシラをきるのか？」

「うわあ、麗ちゃんのオマンコ、すつごく汁を垂らしてるよ？ もう、オマンコしてもらいたくて我慢できないんじゃない？」

美月までもが、卑語を駆使して嗜虐的な言葉責めをしてくる。仲のいい友だちだと思っていた女性の容赦のない言葉は、麗にショックを与えた。自分は孤立無援であることを、改めて思い知らされる。

「あ……ああつ、それは……わたしは……」

「素直になれよ。処女でもない……男のモノで可愛がられる女冥利を知る身なんだ……我慢しきれぬもんじゃないだろ？」

ぐちゅっ、にゅちゅっ、じゅっぽっじゅっぽっ、にちゃにちゃ。

乳首をちゅぱちゅぱ吸いながら、ガニ股の股間に指を入れて抜き差しする京一郎。

（き、汚らしい男の指が……私をあそこを出入りしてる……なのに……ああつ、気持ちいいっ……）

ゴツゴツした指の凸凹や指紋の微細な凸凹が、熟れた肉ひだを引っかいている。滲み出る愛液が刺激をまるやかにしていて、心を腐らせるような甘美を味わわせてくる。

もしも夫にされているのであれば、屈託なく身を委ねるのだが、相手は自分を脅迫してくる下衆な男なのだ。これまでの態度を見るに、女を性技で屈服させて満足するようなタイプに思える。

夫への貞潔を捨て、そんな男に快楽をねだるなど冗談ではない。

「やああつ、そこだめっ……んあああつ」

「ここが奥さんのGスポットだな。旦那は触ってくれてるかい？」

だが、そんな自尊心は男の指先一つでばやけさせられる。膣内の一点を優しく擦られると、鮮烈な快感電流が背中を貫いて頭の芯を白ませる。

両乳首を同時に責められているのも難物だった。ひっきりなしに追加される乳悦が、膣快感と結託して相乗効果を起こし、麗の身体を熱く蕩けさせる。

乳房も膣も熱くなる一方で、身体の他のどこよりも高熱を帯びている。舌で舐められる乳首はビンビンにそそり立ち、ガニ股の股間からは愛液がたらたら漏れており、内腿を伝い、床に恥ずかしい染みを作っている。股間も内腿もすっかり愛液に塗れてテラテラと輝いており、まるで、淫らと嫌悪した美月の姿そのものだった。

「もう堪らないって感じなのに頑張るな……よし、ふんぎりをつけられないなら、俺がラクにしてやるよ」

「なにを……あああつ……」

### 第三話 染みを消すために

京一郎は猫でも抱えるように麗を抱き抱え、ベッドの上に四つん這いにさせた。次いで、彼女のお尻に回り込むと尻たぶを握りしめてヒップを高く掲げさせる。

「こんな格好……やめてっ……はあ……はあ……」

抗議をしながら振り向く麗の顔は、官能的に上気している。声も甘いあえぎ混じりで、普段の力強さは微塵もない。

「くくくく……なんていやらしいんだ奥さん。旦那にもこんなくしょくしょマンコを見せてるのか？」

京一郎の言葉責めに、美月も目を輝かせて参加する。

「ふああ……おつきなお尻の割れ目の底で、パイパンのオマンコが、涎を垂らしながらヒクヒク言ってる……お肉の花びらも使い込まれてるみたいに厚いのに、ここも染み……つない美肌なんだねー」

「いやあつ、言わないで……」

ふたりに品評され、麗の全身が恥辱の高熱で覆われる。その熱は興奮を冷ますストレスにはならず、望まぬ責めで昂らされた官能の薪となって麗を苛む。

（いやだ私……こ、こんな、犬みたいな格好をして、アソコを見られてるのに嫌じゃない……？ 胸がドキドキして、気持ちいいって思ってるの……？）

戸惑う麗をよそに、快感と熱で力の入らない尻がぐっと高く持ち上げられた。



### 第三話 染みを消すために

「あひいいいつ、やあつ、やめて、そんなものを近づけないでっつっ！」  
「いくぞ奥さん……これが俺のモノだ」

京一郎がズボンを下ろして自分の逸物を取り出すと、その先端を麗の潤った秘唇に押し当ててきた。膣口までには達していないが、大陰唇を巻き込んで、熱感と重量感をなすりつけてくる。

（ああ………すごく熱い………硬い………恥ずかしいお汁でぐしょ濡れの私のお肉の花びらに挟まれて………ああ………先っぽすごくビクンビクンしてる）

亀頭の振幅は肉花卉を經由して膣に響いてくる。無理矢理発情させられたとは言え、官能に燃える膣には意地の悪い誘惑だった。相手が夫であったなら、自分から淫らに尻を押しつけ、肉棒を呑み込んでいたところだが、相手は夫ではない。

「奥さん、このままズブリとして欲しいだろ？ 素直に頷けば、天国に連れて行ってやるぜ？ おらおら」

プリプリの肉端が、膣口につくかつかないかの浅いピストンを繰り返して来る。大陰唇がめくられ、敏感な内側が何度もツンツン擦られる。

大陰唇の内側と膣口に、焦れたい快感が起こり、膣内がもどかしそうに痙攣を起こす。愛液の分泌も増し、卑猥な水音が大きくなる。

人妻を快感で苦しめる亀頭は、人妻の愛液でコーティングされ、照明の光を浴びて

キラキラとした輝きを放っていた。

「ああっ……あああ~~~~~！ やあっ、いやああっ……」

熱く潤う膣内がもどかしくて堪らず、このまま尻を押しつけて呑み込んでしまえという甘言が心の隅に響いている。

（だめよ、私には愛する夫が、あの人がいるのに……自分から求めたら不倫じゃないの……そんなことはできないわ……！）

快楽と良心が、熟れた二十七歳の身体を舞台に葛藤を繰り広げる。

麗の眉目は八の字にたわみ、額に滲む脂汗が鼻梁を伝ってシーツに落ちている。染みは、赤子の拳大だった。

「まったく頑固な奥さんだ。ここまでされても、まだ飛びついてこないとはな」

恐れ入ったとばかりの京一郎の呟きだったが、目はむしる喜んでおり、まるで強い獲物を見つけた狩人のそれであった。

「おい、美月」

「はい」

夫の目配せを受けた妻が、放置されていた薬瓶を拾う。ふたを開け、一、二滴指に垂らすと、その指で麗の乳房の模様を擦る。

「あ……薄くなって……」

麗が弱々しく目を剥いた。あれほど苦勞してもどうにもならなかった忌々しい染みが、ほんの少量の薬液で色あせたのだ。信用ならない男に見えるが、麗の弱みになっていたあの小瓶の中身は本物だったらしい。

「奥さんはこいつが欲しいんだろ？ だから、俺の『言う通りにする』と言ったんだよな？」

京一郎は、さりげなく前提をすり替えた。抱かせるとは言ったが、言いなりになれとは言っておらず、麗もそこまで承諾してはいない。

しかし、快感で意識が朦朧としている麗は欺瞞に気づけない。反論してこないのを確認すると、彼は続けた。

「だったら、自分から俺のモノを呑み込むんだ。それだけでいい。それで全部上手いくんだぜ」

いやに優しい囁きが、麗の心に染み込んでくる。

（ああ……私が、この男のペニスを受け入れればあの薬が……し、仕方ないわよね

……あの人との生活を守るためですもの……）

視界の隅で、美月がまた薬品を指に垂らして乳房の模様を薄くした。

にゅぷ……………。

麗の尻たぶが、京一郎の下腹に向かってスライドした。

「おつと、まだだ。俺のモノを啜え込むんなら、『お薬が欲しいのでおチンポいただきます』と言え」

「そんな……そんなはしたないこと……」

「嫌なら、全部水の泡だ。この話は最初からなかったことにするぜ」

幸せな夫婦生活のためとはいえ、夫以外の男のペニスを自分で受け入れるだけでもイケナイことだというのに、この男はさらに屈辱と恥辱を強いてくる。

貞淑な人妻の心が、破廉恥な台詞を口にすることを強く止めてくるが、どういうわけか心のどこかでは、それを言いたいという思いが忍び込んでいた。

（仕方ないわ……薬をもらうためですもの……）

ゴクリと唾を飲み込み、はあはあと荒い呼吸をした後に、麗はおずおずと口を開く。最愛の夫にも言ったことのないような淫らな台詞を、下劣な男に向かって言う。

「お……おお、お薬が欲しいので……ああああ、おチンポ……おチンポいただき……ます……」

「だめだ。もつといやらしく、媚るようにだ」

「ああ……お薬が欲しいのでえ、はああんっ、おチンポおいただけさせていただきまあすっつっつ」

ぬぷ……。

### 第三話 染みを消すために

「誰のだ、誰のチンポをいただくんだ？」

「ああああ、あなたの……ですう……」

（あああつ、おかしくなるっ……こんな浅ましい言い方してたらおかしくなるうっ）

男に媚びることなどしない麗であるだけに、一度やりだしたら転げるように勢いがつく。悔しくて、惨めなのに、胸がドキンドキンして不思議な快感を感じてしまっ。

「あなたじゃだめだ。名前を言え、さもなきや」

「きよ、京一郎さんです！ お薬が欲しいからあ、京一郎さんのおチンポおお、いただかせていただきま〜〜す うんん……んあああああつ!!」

大声で叫び、無理難題をふっかけられる前に一気に尻を後ろに突きだした。

夫との性生活で鍛えられた肉ひだが、他の男のペニスのカリでゾリゾリ擦られていき、亀頭の先が子宮口にぶつかった。

（すごいっつっ……このおチンポ、カリが高くて、亀頭が大きくて……あああつ、脈打ってる……私の中でどくんどくん言ってる……!）

じっくり見ていないので定かではないが、膣の中で高熱とズツシリとした重量感を放っている勃起ペニスは、信じられないくらいに雄々しく感じられた。

「わあ〜、麗ちゃんのオマンコの入り口、キョウちゃんの極太チンポの形に沿って丸



### 第三話 染みを消すために

く広がってて、愛液がぶしゅ〜〜ってえっちな音を立てて漏れてるうー」

「奥さんのマンコはミミズ千匹だな。しかも、ヒダの谷間が深くて……ふう〜カリで擦り甲斐のある特上マンコだぜ」

「ああ……言わないでっ、恥ずかしい……んああッ！」

ぬちゅっ、じゅちゅっ、ぬっぷ、ぬっぷっん、じゅぼっつ。

いやいやと髪を振り乱す麗を、京一郎はバツクから突く。

美月が極太といったペニスに、ベッドの上で夫と作り上げた人妻の膣を素早く行き来する。

高いカリ首が溝の深い肉ひだ筒を何度もヤスリがけし、プリプリの亀頭の先で子宮口を叩く。

尻肉をガツシリ掴んでの抜き差しは力強く、麗の身体は芯から揺さぶられる。

だが、それは苦痛ではない。待ちわびた肉棒を迎えた膣は、日頃受け止めている幸田のモノでないものが入っているにもかかわらず、ねっとり淫らに絡みつきしつこく纏わりつき続ける。

膣がそんな反応をするだけに、麗の快感も相当だった。

一突き毎に鼻先で火花が散る。カリ首まで引き抜かれ、次の瞬間に勢いよく膣内全部を擦りあげられ、仕上げに子宮口を突かれるのは、頭が真っ白になるほどの大きな

快樂だった。

「ひあああつ、だめつ、そんな激しいつ、んあああつ、だめ、おかしくなるつ、こんなすごい忘れられなくなるううつ、アアアア！」

「おかしくなるだつて？ どんな理由があるつと、自分から他の男のチンポを啜え込んだ時点で、奥さんはもう不倫をしてるってことになる……不倫なんてしなかった昔のあんたが今のあんたをみれば、もう既におかしくなってるって思うはずだぞ」

「はあああつ、ち、ちがうつ、私は不倫なんかつ、私はあの人だけを愛してる……はあ、はあ、あなたなんか好きじゃない、これは仕方なくしてるだけ……んあああう」

それは本当だった。迫られた結果で、この男のペニスを受け入れたが、愛していないし好きですらない。心の真ん中には、今でも幸田がいる。

しかし、快感を感じてしまっているのも事実だった。愛していず、好きでもない男に、麗はセックスの喜びを感じさせられている。

夫のために磨いている身体はすっかり紅潮し、細かい汗の粒がそこかしこに浮いている。贅肉のないならかなお腹が忙しく上下しているのは、絶頂が近いサインだ。膣内も断続的に痙攣して騒がしくなっている。

「ああつ、だめ、イクのいやつ、こんな男との、こんなセックスでイクなんて許されないつ、ふああつ、で、でも、あああつ、だめだめ、とまらない、気持ちいいの、

### 第三話 染みを消すために

とまらないつつつ」

「嫌いな男に抱かれてイクなら、奥さんは立派な淫乱だ。淫乱なら、不倫をしても不思議じゃあないよなあ？」

淫乱の烙印を押すべく、彼は躍起になってペニスの抜き差しをする。

「おおっ、奥さんの淫乱マンコ、夫じゃない俺のペニスも歓迎して……んああっ、出るぞ、俺の精液が奥さんの中で……くくく、他の男と……この俺と一緒にイってくれよ奥さん……同時に天国へいこうぜ……おおおうっ」

「ああっ、いやいやいやいや、あなたなんかと一緒にイキたきたくないっ、中でも出さないでっ、妊娠しちゃう、こんなセックスで、しかもあなたの子供なんていやあ！」

麗は力一杯嫌がるが、ピストン快感のせいで身体に力が入らない。主導権はすっかり京一郎にあり、麗は受け身でいるしかなかった。

「び、ビクビクしてるっ、おチンポがわたしのオマンコの中でビクビクして……ああ、あああっ、膨らんでるっ、子宮口に嵌ってビクビク膨らんで、ああっ、あああっ！」「出るぞ奥さんっ、俺の精液……おおおおっ、たっぷり受け取って奥さんもイっちまえ！」

子宮口に嵌め込んだ亀頭の先を小刻みにピストンさせ、その快感で精液を放出させた。



### 第三話 染みを消すために

夫にしか許すべきでない人妻の膣の奥で、弱みを握って肉体関係を迫った下劣漢の子種汁が炸裂する。

どっびゅうううううう！ どぐんっくくくくくく！

「んあああああつ、いやっ、あああ、だめ、いつちゃうっ、中出しされたザーメンすぐくてイクっ、イクうううううう！！」

麗の背筋がグンツと仰け反り、同時に頭が跳ね上がった。髪が舞い、付着していた汗がキラキラと撒き散らされる。

「あはは、麗ちゃんイってる、キョウちゃんにザーメン中出しされてイってる」  
京一郎の精液は熱く煮えたぎっていた。官能の炎で炙られていた膣や、欲望塗れの肉棒の熱さにも勝り、膣内射精されたことを思い知らせる。

精液もドロドロで、もしも口内射精されたのであればしつこく喉に絡みついてきそうな粘度だった。それほどの粘着力を持っているなら、精子の生存確率も高いだろう。「いやいやいやっ、精液出さないでっ、妊娠するいやっ、中出しいやっっっ、あんんんんっ！」

（どうしてっ、嫌なのに、ダメなのに、こんな男の赤ちゃんできちゃうかも知れないのにっ、気持ちいいっっ、オマンコで中出しされて気持ちいいの止まらないっっ）

妊娠を強く意識するほど、ドス黒い悦楽が麗の内部を駆け抜ける。絶望的な膣内射

染められ奥さん

精を受け、望まぬ同時絶頂をさせられたことで、背徳に興奮するマゾ気質も芽生えてしまったのかも知れない。

貞淑な人妻は、イケナイと思えば思うほど、無理矢理感じさせられた快感にゾクゾク震えてしまっていた。

「あああ……はああああ……あぁ……」

糸の切れた操り人形のように、麗がガクリと倒れ込んだ。絶頂失神をしたのだ。

意識が闇に堕ちるまで、麗が感じていたのは快感だった。性交渉の冒頭では確かにあつた嫌悪感や汚辱感といったものは、霧散してしまっていた。

# 第四話 望まぬ約束

「んん……」

「あ、起きた？」

目覚めると、夫に抱き抱えられていた。いわゆるお姫様抱っこである。

場所は自宅で、自室のベッドに寝かされるところだった。枕元の時計を見ると午後七時二十分を過ぎていた。

「私…… どうしてここに……」

「入巢さんのご夫婦がまた送ってきてくださったよ。軽食をとった後にうたた寝をしちゃって起きそうになかったんだって」

あの夫婦が吐いた夫への嘘で、麗は真相の見当がついた。京一郎に絶頂失神させられて、そのまま自宅に運ばれたのだ。

衣服は家を出た時と同じだったが、ふたりがかりで着せたのだろう。そんな乱れ方をしている。もつとも、情事を疑わせるほどには崩れていないが。

「最近、疲れてたんじゃない？ 今日はこのまま寝ててよ。風呂や夕飯はぼくがするから。何か、食べたい物はあるかい？」

ベッドに寝かせると、夫は微笑を浮かべて訊ねてくる。

「ありがとう……あなたが作ってくれるのならなんでもいいわ……私は、先にお風呂に入らせてもらうわね。準備は自分でできるから……心配しないで、あなた」

夫の優しさは、仕方なかったとはいえ、不貞を働いた身には堪えた。いつもは心が温かくなるのに、今は傷口に塩を塗られた気分で、胸が鈍く重く痛む。

努力して微笑み返すと、夫は頷いて一度退出し、すぐに戻ってきた。

「これ、麗の荷物と君が入巢さんから買った香水。渡しておくね」

そして、夫は夕飯の準備に行った。

「『買った』ね……あの人にはそつ説明したのね……面白い表現だわ……確かに、私は自分の貞操と引き替えに、これを買ったようなものだわ」

胸につけられた模様を消す薬瓶を見て暗く呟くと、麗は生気のない顔で立ち上がり、浴室へ向かった。

模様を消すことも大事だが、膣内射精された精液を掻き出すというもっと重要な仕事が残っているのだ。

お腹の中にザーメンが堆積している不快な感覚を、一刻も早く拭いたかったし、妊娠してしまう確率を少しでも減らしておきたかった。

「な、なによこれ……ッ！」

虚ろな目でシャワーを浴びようとした時、壁掛け鏡に映ったお腹を見て麗は絶句した。

そこには『中出し済み』と黒字で書かれており、股間に向けて矢印まで引かれてある。

「ひどい……冗談にしてもあんまりよ……！」

麗は早速消そうとしたが、模様の時と同じく成果はなかった。例の薬のことを思い出し、使ってみたが胸の模様はあっさり消えたものの、文字は薄れもしない。

「どうしよう……こんな身体、ただでさえあの人に見せ難いのに……！」

裸のガニ股姿をじっくり鑑賞され、胸や乳首を汚された。目を閉じれば、今もしゃぶられた感触が蘇って、背筋に悪寒が走る。膣内を蹂躪したあのペニスの触感も生々しく覚えている。望まぬ絶頂をさせられた時の屈辱と、ドス黒い快感も……、

「か、快感じゃないっ、嫌だったのに……無理矢理されたのに……っ！」

麗は文字を消すことはひとまず諦めた。シャワーを使って精液をできるだけ掻き出して、乳房と乳首にたっぷりボディソープをまぶして念入りに洗った。

（ああ……綺麗にしているはずなのに、気持ち悪いのが消えない……ぜんぜん汚れが取れてない気がしてならないわ……こんなものって……）

身体に纏わりつく汚辱感は薄まらず、妊娠の恐怖も拭えなかった。

その後、夫に不審に思われまいよう、努力してなに食わぬ顔をしながら、夫婦で夕食をとった。

せっかく用意してくれた夫の料理の味は全然分ならず、顔をまともに見ることもできなかつた。ろくな会話をすることさえなく、麗は自室に下がった。

後は寝ててと言つて、後片づけなどの家事の一切を引き受けた夫の労りには、嬉しさよりも胸を刺されたような痛みを感じた。

一人になつた麗は携帯電話をプッシュする。かける先は名刺に書かれた京一郎の携帯電話だつた。

彼はなかなか電話に出ず、イライラが頂点に達しようとした頃にようやく出た。

「おや、奥さん。こんな夜に一体なんですか？ ひよつとして、不倫密会のお誘いで？」

「ふざけないで！ 約束を破つておきながら、言つに事欠いて不倫密会ですつて？」  
勘に障るおどけた口調に、麗は怒鳴らずにはいられなかつた。

「おいおい、旦那に聞こえたら困るだろ？ もっと冷静になつたらどうなんだ奥さん」

小馬鹿にするような喋り方から一転して、あの無遠慮な口調で言つてきた。

彼の言つてゐることはもっともだが、それをすべての元凶に言われると腹が立つ。

麗は忍耐力を総動員して音量を下げ、ぶっきらぼうに言い放つた。

#### 第四話 望まぬ約束

「お腹の落書きを消す薬を頂戴。お腹のも、特別な薬品でないと消せないんでしょ？ 約束を破ったんだから、今すぐ持ってきて。家は分かっているんだから」

「約束を破っただって？ わけの分からないことを言ってくるなよ奥さん。俺は、ちゃんとあの小瓶を旦那にやったぞ。あの真面目そうな旦那のこと、律儀に奥さんへ渡したんだろ？ どこに約束違反があるんだよ」

「私のお腹に落書きしていいなんて言ったことはないわ」

「ああ、俺も聞いてない。けど奥さんだって、俺が書かないと言ったのを聞いてはいないだろ？」

いけしゃあしゃあと京一郎は言ってくる。悪びれた様子は微塵もなく、むしろこの戯れ言のようなやりとりを面白がっている節がある。

「そんなの屁理屈よ。常識で考えれば、お腹に落書きしていいはずないでしょ。揚げ足取りなんてしてないで、早くもってきてよ……！」

「そうだな……今すぐ届けろってのはできない相談だが、薬が欲しいなら、また会ってやらせてくれるかい奥さん。承知してくれるなら、薬はその時もってくよ」

「嫌よ、またあなたと………するなんて」

「けどよ、あれが消えないと困るんだろ？ 嫁がやらせてくれねーとなれば、どんなに温厚な旦那でも浮気を疑うもんだぜ。それに、仕事で疲れてきて美人の妻とセック

スできねーってのは相当なストレスだ。ストレスは人間関係をギスギスさせて、しまいいには離婚とかになるかもな」

下衆な男の言葉なので真面目に聞く気はないものの、浮気を疑われる、離婚、などといった最も聞きたくない言葉は、夫を愛する妻の心を揺さぶってくる。

それに、浮気を怪しまれた時、全力で否定できる自信もない。進んで不倫したわけではないものの、自分は確かに他の男に抱かれたのだから。

夫婦生活がおかしくなる前に、火種は消しておかなければならない。

「分かったわ……また………相手をするから………」

「ぐへへへ、物分かりのいい奥さんで助かるぜ。じゃ、今度は………」

会う約束を交わした麗は、まるで鉛を呑み込んでしまったかのような不快感に襲われる。

胸が辛く、重力が何倍にもなったかのように手足が重く、ちょっとした所作もひどく疲れる。

（でももう少しの辛抱よ………今回は失神してしまったから、そこをつけ込まれたの………今度は絶対に、気絶なんかしないで終わらせてみせる………あと一回、あと一回我慢すればいいんだから………）

それが正しいはずなのに、麗の気は晴れなかった。

# 第五話 心と身体に広がる染み

「いい格好だぜ奥さん……見事な釣り鐘おっぱいも、よく熟れたオマンコも……なに  
よりスベスベツヤツヤの美肌が丸見えだ……くくく」

「いやらしいね、麗ちゃんの身体」

「いやっ……こんな格好……うう……恥ずかしい……」

麗と入巢夫妻はラブホテルの一室にいた。腹部の野卑な落書きを消す薬を得るために、再び身体を捧げているのだ。

三人は全裸だった。麗だけでなく京一郎も筋肉質な裸体を晒し、美月も童顔のトランジスタグラマーの色っぽい女体を見せている。夫の趣味だろうが、彼女の身体には、蝶などの模様が描かれていた。それらは美肌とよく合っていて、彼女をより魅力的に見せている。

裸の麗はキングサイズのベッドに仰向けに寝かされていた。両手首と両足首がベッドの四隅の支柱に括りつけられたロープと繋がっており、×の字の体勢になっている。天井の強烈な照明が前半身を隅なく照らしていて、まるで全裸で手術台が上がっているようだった。

仰向けでも崩れない八十八センチFカップの釣り鐘型巨乳、五十八センチの細いウエスト、八十八センチのヒップのライン、贅肉のないお腹と、そこに書かれた『中出し済み』の落書き、長くて流麗な手足、そしてきめ細かくて滑らかな淡雪めいた美肌。全部が丸見えになっている。

すべて夫を楽しませるために磨いてきた物なのに、夫でもない男に視姦され、さらには品評までされる屈辱と恥辱に頭が焼き切れそうだった。

身体もカツカツと熱くて、十分にエアコンが効いているというのに、全身に細かい汗が浮き上がる。端麗な美肌にキラキラとした七色の輝きが加わり、卑劣な鑑賞者の目をいつそう楽しませているのも悔しかった。

「こんな風に拘束して、今日は何をするつもりなの！」

麗は気丈に睨みつける。身体は許しても心は許さないとの強い思いが表れていた。加えて、今のような悪夢を繰り返さないために、今日という今日は絶対に失神しない、一時も気を抜いて堪えるものかという強固な意志も瞳に滲んでいる。

「おつかねえなあ。別に暴力を振るおうとか、そういう気持ちはこれっぽっちもないんだぜ。そう構えるなよ奥さん」

京一郎は、もう荒っぽい口調になっていた。麗の睨みにも肩をすくめるだけで、気圧されている様子はない。

## 第五話 心と身体に広がる染み

「暴力は振るわない？ よく言うわ。弱みにつけこんでセックスの相手をさせたり、勝手に身体に落書きしたり……これって立派な暴力よ！」

「くくく……じゃあ何か、奥さんは暴力であんあんあえいじまう変態なのかよ？ おい美月、見てたる奥さんが気持ちよさそうにしてたところを」

「うん。麗ちゃんったら、恥ずかしいお汁をだらだら垂らしたり、キョウちゃんに中出しされてイツたり、そのまま失神しちゃってたよね。全部覚えてるよ」

「なっ……あ、あれは……！」

無論、麗も覚えていた。望まぬ性交だったというのにはしたなく乱れてしまった記憶は、脳に深く刻まれていた。寝ている時に夢に見て、ハッと目覚めた時にはショーツがぐっしより濡れている、そんなことが度々あった。

お陰で夫と寝るわけにもいかなくなり、ここ二日は体調不良を理由にして自室で一人で眠っていた。

「そういうことだよ奥さん。今日もたっぷり可愛がってやるぜ」

（つつ……あの時は不覚をとったけれど、今度は絶対にあんなことにはならないわ……今日で、この悪夢を終わらせてやるんだから……！）

決意を固め、麗は奥歯を噛みしめた。

「じゃあ、そろそろ始めるか……くっくっくっ……今日がくるのが待ち遠しかった

染められ奥さんぞ

京一郎は、とかげのように四つん這いになる。麗の右手を手にとると、親指から順に指を舐め始めた。食べ物に口をくわえ、口に含むようにパクリと口腔に招き入れ、口中で指の隅々を舐め回す。指の腹に舌を巻き付け、間接部をほじり、最後は女が男の逸物を吸い上げるようにバキュームして締めくくる。

麗のほつそりとした指が、下衆な男の唾液に塗れ、指紋の底まで唾に染まり、舌で舐め擦られる感触が刻み込まれる。

「ひいいいっ、な、何をし……あああっ……」

（何これ……指なんか舐められているのに、力が抜けて……この脱力って、まるで快感を感じている時みたい……！）

おぞましいと思うのだが、奇妙な寒気が背筋に走り、腕から力が抜け、手の平を握り締めることさえ難しい。

「奥さんの指、美味いぜ……これから指だけじゃなく、奥さんの美肌全部を舐めさせてもらうぜえ」

五指を舐め終えると、京一郎が口角を吊り上げる。

「肌を全部って……まさか全身を舐め回す気なの……！」

「ああそうさ……言ってる？俺は美肌が大好きだって……奥さんの肌は、これま

## 第五話 心と身体に広がる染み

で見たことないくらいに綺麗で……その上美味い。だから、全部を味わいたくって堪らないんだよ」

今度は手の平を標的にし、縦横に走る線を舐め始めた。

「いいや……んあぁっ、はぁっ……はぁあし、舌が……這いずって……はぁぁっ」

彼の所作は至極丁寧で、まるで高級ガラス細工を丹念に磨いているかのようだった。暴力的な要素は何一つない。だが、麗は恐ろしかった。

（汚されてる……私、汚されてるわ……！）

全身を舐められ、その唾液と舌の感触を染み込ませられたとしたら、そんな身体を夫に捧げられるだろうか？ 夫も自分の肌を舐めたり吸ったりして楽しんでくれる。なのに、京一郎が手をつけた部分を、夫の好きにさせるとしたら、それは侮辱以外の何だというのか。

「いやっ、やめて……お願いっ、他のことは何でもするから……フェラでもパイズリでも……ガニ股ポーズだってとるからぁ！」

思いつく限りの肉奉仕を口にするが、京一郎は止まらない。ゆっくりと自分の征服地帯を広げている。

（だめっ……あああっ、手足が縛られてるから逃げることもできない……あああああ  
あ、手の平が全部汚されて、今度は手首に降りてきて……！）

自由を奪われてもいる麗は、自分の身体を隅なく汚される様子を見ているしかできない。

「えへええ、奥さんの肌はやっぱり極上だぜ……汗の酸っぱさも美味しいし、何より肌が仄かに甘くてなあ……ミントみたいに軽くて爽やかなのにコクがあって舌に味が残る……きめ細かいツヤツヤ肌の見た目の綺麗さと……プリプリする弾力がまた堪らねえしな……こんな肌を味わえるなんて嬉しくて、それだけで勃起するぜ」

その言葉に嘘はなかった。四つん這いの彼の股間では、硬く膨張したペニスが、動きに合わせてぶらんぶらんと揺れている。

（変態だわ……この男、本当に変態なんだわ……こんな男に私は……あの人に喜んでもらおうと磨いてきた身体を……よりもよってこんな男に……！）

いくら嘆いても、筋力を総動員してもがいても手足の戒めは解けない。麗は肉人形のように、舐められ続けるしかない。

「つつうつ……ふあ……くう、腋が……ああっ」

腋の下の窪みを舌でほじられた時、背筋に微快感が走った。うなじに鳥肌が立ち、股間が天井に向かって突き上がり、大陰唇がヒクヒク震えた。

「ふへへへ、奥さんの好きどころ見つけ。腋の下が弱いなんて可愛いじゃねえか……手指もけっこうイイ反応してたけどよお」

## 第五話 心と身体に広がる染み

片手で二の腕を掴み、もう片方で脇腹を掴んで外側に押しながら、顔をグイグイ腋の下に突っ込ませる。京一郎は、舌をより密着させながら、腋の下をほじる。

「ああっ……あくうあっ、だめっ、そんなにされたら……あっくくく」  
身体が跳ね、尻たぶがベッドに落ちてむにゆりとひしゃげる。釣り鐘型の巨乳も弾み、体表の汗が飛び散って照明を浴びながら宙空でキラキラする。ベッドと女体の鈍い衝突音が周囲に響き、バフバフと空気が掻き乱される。

「あ、麗ちゃんのオマンコ、濡れてきたよ。本当に腋の下が好きなんだね」

「え、違うつ、気持ちよくなんか……濡らしてなんか……ああ……ああっ……」

麗の足元で鑑賞していた美月の言葉に、麗は自分の股間を見て愕然とした。

本当に潤っていたのだ。性感帯を愛撫されている時みたいに愛液がトロトロ漏れていて、シーツに小さな染みを作っている。

（こんなことをされているのに……感じてしまっているの？ 腋の下が性感帯だなんて、私もあの人も知らなかったのに、こんな男に知られてしまったの……？）

危機感が募る。裸を見られるだけでなく、身体秘密までもが暴かれては、自分の身がこの男の所有物になっていく気がする。

「あああ……はあっ、んああっ」

だが、そのストレスは快感を紛らわせるものにはならず、反対に高めるスパイスに

なっていた。

腋の下を舌でほじられる度に、背筋がゾクゾクして、身体が淫らに火照ってくる。股間が潤う感覚も強まって、膣内が鈍く疼いてくる。

（こんな……あああつ、わ、私の身体……おかしく……うんつつ）

前回の性交で目覚めさせられたマゾ気質も拍車をかけていた。日常生活では眠っていたそれが、京一郎の異常な性癖によって再び目を覚まし、麗の心を蝕んでいる。

京一郎は、麗をたっぷりあえがせた後、肩に移動し、鎖骨、うなじ、顔、そして向こう側の鎖骨へと移り、もう片方の手も毒牙にかける。

どの部位でも、ただの一点も見落とさずに舌の感触と唾液をすりこんでいた。

顔をされた時などは、鼻息と吐息が顔にかかって男のナマの口臭を嗅がされたというのに、顔を舐められるのにも快感を感じてしまった。頬をふしだらに紅潮させながら嫌がると、京一郎はひどく満足げだった。

「ああああ……そ、そこは……んあああつ、だめっ、弱い……あああつ、捜し当てないで……私の弱いところ……そこはあの人も知らないの……うああ……はあああ……！」

脇腹から腰、太腿、膝、ふくらはぎ、足、そして足指。どこも手抜きなく、隅々まで舐めしゃぶられていく。

## 第五話 心と身体に広がる染み

麗は行為が始まる前にシャワーは浴びていなかった。味でそれを看破した京一郎は『奥さんのナマの味だ』などと言いながら喜色満面で舌を巡らせた。嫌そうな顔など全然しない。

麗にしてみれば、恥ずかしいし、シャワーを浴びていない身体を喜んで舐められるのもおぞましくて堪らないのだが。

しかし、そんな麗も心のどこかでは、そうされるのを快感に感じてしまっている。目覚めさせられたマゾ心のせいだった。

腰が何度もカクカク上下し、ペニスでも誘っているかのように秘唇が左右に開閉する。愛液でぬめり光るバラ色粘膜から、噴水みたいに愛液を噴き上げていた。

「はあっ……はあっ……これで終わりなんでしょ……っうああ……」  
足指を終えてうがい薬でうがいした後、京一郎は乳房に取りかかった。前回の情事ではやぶり抜いた乳首と乳輪もねっとり舐めてきて、口を離された今もまだ舐められている心地がするほどだった。

そうして全身舐めが終わった今、あとは女性器にペニスを突き立てて、欲望の汁を飽きるまで吐き出すだけのはず。そう、麗は思ったのだが。

「まさか。これで半分だろ？ まだ背面が残ってる」

どこか、揶揄するように京一郎が言い放った。

「え……背面……後も……後半身も舐めるつもりなの？」

「肌は後ろにもついてるじゃないか。そっちも味わわせてもらうぜ奥さん」  
「獰猛な笑みを浮かべながら舌なめずりをする。」

「そんな……いや……もういやあ……これ以上、汚さないで……え」

麗の哀願はやはり聞き流された。京一郎は彼女の拘束を解くと反対にひっくり返し、また拘束具を嵌めてくる。

麗は、前半身を舐められて、あえがされている内に体力と気力を消耗してしまっていて、抵抗することはできなかった。

「うああ……あふあああ……舌が、また……んふうふう……」

残りの半分が始まった。手の甲から、腕の裏側、肩胛骨、首の後ろ、反対側の肩胛骨、腕、背中、尻たぶ、太腿の付け根、太腿、膝裏、ふくらはぎ、踵、足裏。後半身も、前半身と同じく非常に丹念に舐められた。

麗はまた、汚辱感とマゾ快感の坩堝に叩き込まれた。

秘所から漏れる愛液は、シートに握り拳大の染みを作り、秘唇とシートは幾本もの愛液の糸でべったりと繋がっている。

全身は汗みずくになっており、淡雪めいた白肌も官能によって赤みを帯びていた。夫に肌を舐めしゃぶられたことはあったが、ここまでの痴態を演じさせられたことは

## 第五話 心と身体に広がる染み

一度もない。

「はあ、はあ、はあ……これで、全部ね……うあ……ああ……ようやく、終わっ  
ひいひいっ！」

ようやく終わったと安堵した矢先、尻穴に奇妙な感覚が起こった。まるで、なめく  
じでも入り込んできたみたいなき色の悪さだ。

れるれるくくんんん……じゅぶじゅぶ……。

「お尻っ、お尻にし、舌があああ、これ舌、うそおおお、お尻の穴が舐められてる、  
ほじられてるうううっっ」

京一郎の尖った舌先が、セピア色の縦皺の一本一本を上から下、下から上へとゆっく  
り丁寧に舐めている。身体の他の部分と同じく、尻穴の皺に舌の感触と唾液が染み込  
んでいく。

「うそうそうそ……ああ、こんなのもって、んぶううう……あああっ、だめっ、お尻  
だめえええツツツ」

排泄の穴を舐めるといって、これまで以上に変態的なことをされているのに、麗は背  
徳的な快感を感じてしまう。

信じられない位に背筋がゾクゾクして、全身を痺れさせるような心地よさを伴って  
心臓がドクンドクンと早まっている。膣内も切なく収縮して、お漏らしでもしている

かのように愛液が漏れている。

「あははは、麗ちゃん、お尻でも気持ちよくなれるんだあ。真面目でかっこいいのに、とんだ変態さんなんだねー」

シートに広がるシミを見ながら、美月が楽しそうに言ってくる。

「ちがうつ、私はお尻の穴でなんか　アアアっ」

「くくく……尻穴がヒクヒクして、俺のべろを締め付けてくるぜ奥さん……夫一筋の貞淑な妻で、ごろつきにも堂々と立ち向かう勇ましい奥さんなのに、尻穴でここまで楽しめるとはなあ……奥さんのことだ、初めてだったんだろ？　ここをこうして舐められるのはよお。なのに、初回から感じちまつてるわけだ」

皺をすべて舐め終えると、京一郎は一旦離れて言ってきた。その声は、髑るような色を孕んでいる。麗の変態性を暴き、それを本人に自覚させ、背悦の世界へ墮とそうとしているかのようだった。

（ああああ……悔しい……悔しいのに……んあああっ）

京一郎は、自分の舌でヌラヌラにした小さな尻穴を数秒間熱視して舌なめずりをした後、再び顔を近づけた。

臀裂に鼻先と額を埋め込ませ、上下の唇を大きく開いて舌を根本まで入れる。

ぷりぷりヌメヌメの舌で尻孔が埋められる感触は、背徳的な快感だった。膣孔を満

## 第五話 心と身体に広がる染み

たされた時に心と身体に訪れる充足快感とは違い、心がぼろぼろになるような、危うくて病みつきになりそうな不思議な甘美である。

「あへえあ……ひぐうううう……そ、そんなに奥までだめえ……ほ、本当におかしくなるう　んんんううう」

オットセイのように背中を仰け反らせ、顎を跳ね上げ、舌を突き出す麗。唇は牡丹色に染まりきり、ぼつてりと厚くなっていた。突き出た舌はその位置で止まり、ピクピクと小刻みに振幅している。

京一郎は麗の身体の快感振動を肌で感じながら、尻孔内部で舌をそよがせる。彼女の肉洞は、押し潰さん勢いで舌を締め上げてくるが、彼は舌で押し返すように内壁に自分の唾と触感を擦り付ける。

「あああああああ、動いてるっ、舌がお尻の中で動いてるっ……んああああっ、ああっ、くうんんっっ」

跡がつく位に深く強く握りしめられている尻たぶが、快感で振動し、内腿が粘つく痙攣する。

「麗ちゃんが気持ちよくてビクビクしてるの、キョウちゃんの肌に伝わって、お尻の孔を奥まで舐められて気持ちよくなっちゃってるのが丸分かりだねえ。あ、また太腿ビクビクいつてるう」

その一部始終を、嬉嬉として美月が鑑賞し、実況中継をしていた。

尻孔を舐め回される肉体快感と、それがすべて入巢夫妻に知られてしまっている恥ずかしさと被虐快感が相乗効果を起こして、常識的だった人妻を悶えさせた。

「はあ、はあ、はあはあ……ああ……今度こそ終わり……よね……」

届く範囲を汚し尽くした後、舌が離れた。しかし、離れた後も麗にはまだ舌のぬくもりや肉感が感じられ、まだ入っている気がしてならなかった。

「まだやることがあるんだぜ、奥さん。おい、美月」

またうがいをして口内を綺麗にした京一郎が、妻に呼びかける。

「ここにあるよ。はい、キョウちゃん」

「一体何を……んっ、ああっ、くすぐりたい……んあ」

硬くて細い物を押しつけられているようだった。舌ではない、他の何かだ。うつ伏せの姿勢では見えないことが不安をかき立てる。それは手足や胴体を転々としていく。

「よし、後ろは終わりだ。今度は前だな」

京一郎は拘束を解くと、麗をひっくり返した。今度は縛られなかった。身体を自由を得た麗だったが、全身を舐め回されて、散々快感であえがされたことで疲労困憊に陥っており、逃げる気力も体力もなかった。

「なっ……いやっ、そんなことやめて……！」

## 第五話 心と身体に広がる染み

快感の余韻の中で青息吐息でいた麗だったが、京一郎がしていることを理解して目を剥いた。

彼はマジックで、麗の身体にチェックマークを描いていたのだ。自分が舌で渡り歩いた部位の一つ一つに、黒い印をつけている。

「美肌を味わったら、印をつけないと気が済まない夕子でなつと。これでよし」とうとう、女性器を除いたすべての場所に印をつけられてしまった。

（ああああ、いや……………私の身体全部……………汚れてしまった……………）

無論、舌で舐めて歩かれたことはまだ覚えている。目を閉じれば、その感触が生々しく蘇る。

けれども、目に見える形で、モニュメントを建てるみたいに印をつけられると汚辱感がひとしおだった。夫に喜んでもらうために磨いてきた身体を、卑劣な手口で脅迫してくる最低の男に味わわれ、征服されてしまった事実を心の芯まで思い知らされる。

「さて……………じゃあ、最後の仕上げといくか……………奥さんも待ってただろ？ オマンコ、こんなにくしょくしょにしまつて、さぞや待ちくたびれたことだろうに」

放心する麗をよそに、京一郎は最後の部分に口をつけた。

「い、いやあああつ、そこまで汚さないで……………んああああ、し、舌が入ってくる……………ああ、だめ、そこまで汚されたら、あの人もうセックスできない、やめて、

取り上げないでっ！」

「へへへ、忘れたのか？ もう、奥さんの身体のどこにも、俺が触れていない場所なんてないんだぜ。今日はまだオマンコしてねえが、前ははしっぽりしたじゃねえか。ほら、腹にそう書き残してるだろ？」

「あああ……そうだった……いや、いやあああ！」

腹部に書かれた『中出し済み』の文字が、麗の瞳に突き刺さり、心を抉った。

自分の身体はもう、どこもかしこも他の男に征服されてしまい、穢れきった身体になってしまっている。結婚してからずっと、夫のために身体を磨いてきた努力が水の泡になってしまった。その成果が、卑劣な男に目を付けられて穢れ尽くす結果をもたらしたというのは何という皮肉だろうか。

打ちのめされる麗だったが、最後に残った物は嘆きだけではなかった。

「んあああ……あはあああ……そんな……んはあっ、んんっ、いやあ、感じちゃう……こんなことになったのに……あふああ、オマンコ、気持ちよく……なってるぅ……っんん」

京一郎は股間にかぶりついて、舌を膣の深いところまで進入させている。男根を抜き差しするようにピストンして、舌のザラザラで膣壁をヤスリがけし、力を込めた舌先で、奥の方の媚肉をゾリゾリこそいでくる。唇で包んだ前歯で、クリトリスをツン



にはみ出した部分を尖らせた舌先で舐め上げる。

「んあああつ、そんなに優しく、ううううつ、あああ、気持ちいいっつ」

特に敏感な快楽器官であるだけに、他の性感帯を舐められていた時の快感を上回る快美を感じさせられる。

一秒毎に頭が真っ白になり、背筋がグンと反り返って艶やかな髪が舞う。

目尻が蕩け、焦点の合わない目は宙空を彷徨う。口は半開きの状態が続き、舌は突き出て、口の端から唾液の筋が垂れている。頬は真っ赤で、汗の膜がかかって平素以上にツヤツヤしている。

「ふへえええ……美味かったぜ奥さん。ごちそうさまだ」

京一郎は口を離す。顔は麗の愛液でべちょべちょになっていたが、彼はまったく意に介していない。それどころか満足そうな顔をしている。

ベッドに転がしておいたペンを手にすると、彼は麗の秘所にチェックマークを書いた。

「奥さん、お疲れさん。俺の気はすんだ。後は帰っていいぞ。薬はそこにある。今日つけたマークも消えるぜ」

「うああ……あ……はあ、はあ……え……?」

快感で意識をばやけさせていた麗が、京一郎の言葉を理解して呆然とした。

## 第五話 心と身体に広がる染み

指さす先には、確かに薬瓶がある。前によこされた物とほとんど同じ外見だった。前回のことを考えれば、薬の真贋は信用してもいいだろう。恐らくは本物のはずだ。

「……………わ、分かったわ……………」

返事をする麗だった。奇妙な感覚を覚えた。

（あれ……………私……………拍子抜けしてる……………？）

どういうわけか、立ち去るのに未練を感じてしまう。

（どうしてこんな気持ちか……………これでいいじゃない……………これ以上、変なことをされな  
い内に帰れるんだから……………身体の落書きも消せるのだし……………）

そう自分に言い聞かせても、心が納得してくれない。このまま帰るべきではないと、  
胸のどこかで叫び声があがっているようだった。

ズクン……………ズクズクズクズク……………。

（やだ私……………まさか……………そんな……………！）

心のもやもやを解消させようと自問自答をしていると、膣全体が疼きだした。それは突発的なものではなく、舌をそよがされていた時から膣奥に感じていたものが、全体に広がったものであった。

それを自覚した麗は、

（また、おチンチンで満たして欲しいって、犯して欲しいって思ってるの……………私の身

体……………私の身体は、あの人だけのものなのに……………あああ)

自分で自分が信じられなかった。そんな時、京一郎の逸物が瞳の中に飛び込んできた。全裸の彼は、あぐらをかいて麗の様子を獰猛な微笑を浮かべて眺めていた。

彼の股間からは、およそ二十センチほどの勃起ペニスがそり立っていた。傾斜角度は九十度近くで、その様子だけでも精力旺盛なことが窺えた。

亀頭は松ぼっくりを逆さにしたみたいな形と大きさとで、体色は黒みがかつた赤紫色。ズル剥けで、カリ首の張り出しぶりはセックス経験豊富な麗も目を見張るほどだった。十センチを越える竿も、麗が親指と人差し指で作る輪よりも太い。黒ずんだ肌色の表面には青くて太い血管が何本も浮いていた。

ペニスの根本や陰囊は無毛だったが、幼さよりも迫力の方を強く感じた。陰囊などは麗の釣り鐘型巨乳のように量感たっぷり、相当な精液生産能力を持っていると感じさせる。

貫禄ある精液の工場といい、ビクンビクンと雄々しく脈動している勃起ペニスといい、膣を疼かせている麗にはひどく魅惑的に見えた。

(ツツツだめよ、私は何をかんがえ……………てっ……………あああ、でも……………す、ごいつ

っ、あんなに……………あんなに大きくて……………硬そうで……………はあああ……………だめ……………なのに……………

……………ツ……………あああ……………)

## 第五話 心と身体に広がる染み

一度膣を貫かれ、何度も抜き差しされた末に絶頂失神させられた記憶が蘇る。膣にもその時の感触が戻ってきて、空っぽの膣の疼きを加速させた。

麗の目は、いつしか京一郎の逸物に釘付けになっていた。心臓がドクンドクンひっきりなしに跳ねて、一向に静まる気配がない。舐め責めが終結して整いかけていた呼吸がまた乱れ始めている。

「なんだい奥さん。物欲しそうな顔して……ひょっとして、俺のチンポが欲しいのか？ 貞淑で、夫一筋の人妻さんが、こんな下衆男のチンポが欲しいと言っのかよ」「酷薄で、揶揄的な口調だった。

（そうよ……あんな男のものを欲しがるなんて最低じゃない……あいつは薬を持って帰っていいって言ったんだから、もう帰るべきなのよ……！）

しかし、そうすれば今この瞬間も大きくなっていく膣の疼きを放置することになる。（あの人に……抱いてもらえば……抱いて……もら……こんな身体を、あの人に抱かせるの……？）

全身に他の男の唾液が染み込み、チェックマークまでつけられているというのに、そんな身体を愛する夫に触れさせていいのか。

答えはノーだ。そんなことは、彼への侮辱以外の何物でもない。それはもう分かっていたはずではないか。

(じゃあ、私はどうすれば……いいの……)

八方塞がりだった。人並みはずれた京一郎の逸物や、夫の男でオンナを感じさせられること　女冥利を知っている身が自慰程度で満足できるとは思えない。

考えれば考えるほど、膣の疼きは大きく深くなり、瞳は目の前の巨根から離れられない。

「痩せ我慢はよしときな。どうせ、俺に穢されちまったんだ……なら、ここで俺のチンポを欲しがっても大差ねえだろ？」

いやに優しい声音だった。以前ならば、元凶がそんなことを言えば怒りを感じたというのに、今は光明にしか思えなかった。

(そう……よね……こんな……こんな身体になったんだもの……これ以上……汚れても……)

自堕落な考えが心に滑り込んできた。夫に心身を捧げ、卑劣な男に怒りを覚える少し前までの麗の考えとは思えない思考だが、そう思うと頭の後ろが軽くなった。

麗の目をじつと見ていた京一郎が、ニヤリと笑った。

「奥さん、俺のチンポ欲しいかい？」

麗は何度か唾を飲み込み、落ち着かない風に首を無意味に巡らせたあと、ゆっくり本当にゆっくりと首を縦に振った。

## 第五話 心と身体に広がる染み

「へへへ、そうかい。奥さんみたいな美肌美人にせがまれちゃあ、断れないなあ。けどよ、人に物を頼む時は、それなりのやり方ってもんがあるだろ？」

「やり方……………」？」

「そうそう。おい、美月。奥さんが分からないみたいだからお前が教えてやってくれ」

「うん、いいよ。麗ちゃんあのね、こう言うといいよ」

自分の夫の肉棒を求めた麗に、美月は先輩風を吹かすように耳打ちした。

聞き終えた麗は目を丸くして硬直した。そんな台詞は言えないと美月に目で訴えるが、「言わないと許してくれないよ？」との言葉を返され、しばし思い詰めた顔をした後で胸に握り拳を当て、決意する。

「……………ああ……………わ、私の浅ましい人妻マンコが、京一郎さんのビキビキチンポで気持ちよくなりたいって泣いていますので……………お、お情けを……………おチンポのお情けをください……………」

「途切れ途切れで本気が感じられないなあ……………本当はどうでもいいと思ってるんじゃないか？」

「だめだよ麗ちゃん。もっと色っぽく堂々と言わなきゃ……………こないだのおねだりを思い出してっ」

（私は……………あの人の妻なのに……………恥ずかしいのを我慢して言ったのに……………！）

必死の思いで言い切ったというのに文句を言われて、悔しくて、情けなかった。だが、膣の疼きを解消するには、目の前の男にすぎるしかない。

「美月の言う通りだ。言い直すなら、四つん這いになって俺のモノに顔を近づけて言え。分かったな？」

（おチンチンに顔を近づけて……ですって……！！）

そこまでの恥を晒すのかと、麗は目の前が真っ白になる思いだったが、膣の疼きは限界にきている。

麗は快樂欲しさに矜持を投げ捨て、京一郎の言うことに従った。四つん這いになって、勃起ペニスの直前まで鼻先を近づける。

（ああああ、に、匂いが……栗の花みたいな匂いと、汗と、甘酸っぱさが……男の匂いが……）

逸物が放つ匂いは、夫のそれよりも野生的で、使い込まれたペニスならではの濃厚な牡臭さだった。

酷く発情している麗はそれに心奪われ、平伏しても構わないとさえ思ってしまった。続く恥辱の台詞は、最初よりもなめらかなものになった。

「私の浅ましい人妻マンコに、京一郎さんのビキビキ牡チンポのお情けをください、もう我慢できないんです……！！」

## 第五話 心と身体に広がる染み

言い終わると、命令されてもいないのに、勃起ペニスに向かって頭を下げる。麗には、言葉の勢いでしてしまった無意識的な行動か、逸物の威容に気圧されて牝の本能がとってしまつた行動か分からなかったが、後悔はなく、むしろやるべきことをやつたという満足感が湧いてきた。

見た目はほとんど土下座だつた。強気で正義感が強く、貞操観念も強い人妻が、卑劣な男のペニスに向かって土下座している。

「くつくつくつ……いいぜ……ほら、チンポ貸してやるよ」

京一郎はいやらしい含み笑いをすると、ベッドに仰向けに寝ころんだ。足を肩幅よりも少し外側に広げ、手は頭の後ろで組んでいる。尊大な格好だつた。

(あうう……跨れつていうの……自分から……)

男根で膣内を満たすには、騎乗位しかないのは明らかだつた。ムダ毛が処理された筋肉質で逞しい太腿の間にそびえる肉棒に真上から跨り、腰を沈め、自分の膣口に亀頭と竿をくぐっていく。

それは、麗の能動的なアクションばかりで構成されている。自分から逸物を啜え込んだという事実にも、何の言い訳もできない行動なのだ。

彼は既に帰宅を許していたし、麗は肉棒欲しさから人妻にあるまじきはしたない台詞を口にした。もう引き返せないとこころまで転げ落ちているとはいえ、これは麗の心

を墮落させる駄目押しだった。

「どうした奥さん。気が変わったのか？ 嫌ならとつと帰ってくれ。奥さんが中途半端でやめちまったフラストレーションを美月で発散させてもらうからよ」

「そうよ、麗ちゃん。やる気がなくなっちゃったんなら、早く帰ってオナニーでもしてたら？ それとも、幸田さんに抱いてもらえばいいのよ」

京一郎は酷薄に、美月は疎ましそうに言ってくる。

（ああ、そんな……あんな最低なおねだりまでしたのに……あれを味わえないなんて……）

人妻は、京一郎の人並み外れた逸物を熱視していた。膣の疼きは最高潮に達しており、このまま帰るなどは考えられない。ましてや、ほんの少しの努力で手が届くところに最高の肉棒があるのだ。

麗は生唾を飲み込んだ。胸がドキドキとやかましく、けれどもドス黒い心地よさで鳴り続けるのを感じつつ、立ち上がった。

「い、いま入れます……からあ……」

か細い声でそういうと、長い足をガニ股にして、逸物の先端の延長線上に秘所を置く。

興奮してぷっくり膨れた肉花卉は、奥のバラ色粘膜を見せながら左右にゆっくり開

## 第五話 心と身体に広がる染み

閉している。秘裂からは愛液がトロトロ流れていて、亀頭にピチャピチャ着弾している。夫でない男の亀頭が、麗の愛液にデコレーションされながらビクンビクンと雄々しく脈打つ。それが麗の欲情を膨らませ、歡喜の色を纏った熱っぽい吐息を吐き出させる。

太腿はぐつしより塗れていて、天井から注ぐ光の中でキラキラとした極彩色を纏っている。

（ああああ、私入れちゃうのね……自分から他の男を求めるなんて……まるで不倫じゃない……でも、もう後戻りするなんて考えられない……ああ、欲しい……このおチンポで気持ちよくなりたい……っっ）

片手でカリ首を摘む。

（あつ……うい……かた……ああいつ……あああ、これ、このおチンポが今は私のものなのね……私のオマンコに入れてもいいのね……！）

麗はもう、牡棒の魅力の虜になっていた。膝を曲げてゆっくりと尻をおろしていくのは、人妻の貞操と肉欲とが葛藤をしている表れではなく、狙いを外さずに一度で肉棒を啜え込みたいという思いからくる、浅ましい慎重さがさせたことだった。

ぐちゅり……じゅずずずっ……。

「んんっ……あああ……あはあああああっっ……」

肉の穂先が大陰唇を巻き込みながら中へ入っていく。肉花卉がカリ首の形に沿って冠状に開ききり、肉竿が続く。入り口は竿の円周を常時咥え込み、まるで分厚い唇で極太バナナにかぶりついているかのようだった。

肉棒と秘所が結合を深めるに従って、微かな隙間からぶじゅ〜と粘い水音が生じ、愛液が押し出される。肉竿を伝う愛液は勃起の根本を汚し、陰囊にも垂れていく。

(すごいいい……中が満たされる……いっぱい……ああああっ、オマンコの中擦れて気持ちいいっ)

カリが肉ひだを擦ると、快感の小爆発が起こる。一ミリ一ミリゆっくり呑み込んでいるお陰で、麗の膣はひっきりなしに強烈な快感に襲われた。

研磨の快感だけでなく、空っぽだった膣内をみっちり充填される快美もある。赤熱した牡肉の熱さや、ドクンドクン脈打つ逞しさ。どっしりとした量感。それらが渾然一体になって、人妻を夢中にさせている。

パズジュンツ……！

尻たぶが京一郎の太腿に着地すると、尻肉がむにゆりとひしゃげ、愛液が周囲に飛散した。麗は背筋を仰け反らせ、舌を突き出しながらわななく。

「んああああっ、お、奥まで届いてえ……押されてる……っ、ビクビクしてるおチンポに子宮が押されてるううう」

## 第五話 心と身体に広がる染み

京一郎の剛直は麗の膣の全長よりも長い。根本まで受け入れると子宮口がかなり圧迫される。セックス慣れしていない女ならば痛みを覚えるところだが、夫との情事でも子宮口　ボルチオ性感帯を鍛え上げていた麗には、この上ない快感だった。

そのままのままでいるだけで、法悦の涙が溢れてきて、頭の中で極彩色のスパークが連続する。男の太腿に乗る尻たぶも、はしたなくガニ股を作る細目の太腿も、快感の痙攣を起こしており、自分の感じようを京一郎の肌に伝えている。

「ほら、せっかくチンポを貸してるんだ。じっとしてないで腰を振ったらどうなんだ？」

墮とした女を見る目で京一郎は麗を見上げ、腰をグイッと突き上げた。

「ひうああっ、あああっ、はあはあはあ、わ、わかってるわ……んっ、んんっ、あああっ」

挿入時に膝に置いてバランスをとっていた両手を、彼の逞しい胸板に置く。

ぬちゅ〜〜っ、じゅぶ〜〜〜っ。

（ああ、すごいっ……長くて、オマンコのお肉が引っ張られて……抜く時も、入れる時も、オマンコ長く擦れて気持ちいいっ……あはああああ〜〜）

肉棒が擦れる快感をじっくり味わうような遅い抜き差しをする麗。膣の中では快感の火花が散り、膣内が甘く痺れる。膣内の様子が頭の中に浮かんできて、そのイメー

ジヤ淫らな水音が抜き差し快美を増幅する。

「んんっ、あああっ、いいっ、気持ちいいっ、このおチンポいいっ、素敵だわあっ、癖になりそうっ〜んんっ」

麗の腰使いが徐々に早くなっていく。ゆっくりすることで得られる快感では物足りなくなり、もつと濃密で陶醉させてくれる快楽を求めているのだ。

自分を罫に嵌めて不倫をさせた憎むべき男に、夫にも見せたことのないほどに浅ましい牝の本性を曝け出し、奔放に細腰をくねらせている。

単純な上下運動だけでなく、深く啜え込んでの円運動も行い、角度と強さを調整して、カリ首に自分の快感スポットを擦らせる。

「ああっ、気持ちいい気持ちいい、こんなの初めてっ、ああっ、いいのおおお、んあああッッ」

「思い切りよがりやがっ。旦那でもない男のチンポがそんなにいいのかよ奥さん。自分から懇願して、自分で伸しかかって、浅ましくチンポをマンコに入れたり……こりゃあ、もう誰がどう見たって不倫じゃないか？ 奥さんは、不倫セックスでそんなに感じてるってことになるぞ」

快楽を貪っていた麗が、苦しそうに眉根を寄せた。まだ心に残っていた良心が、男の言葉で痛んだのだ。

## 第五話 心と身体に広がる染み

「い、言わないでえ、不倫してるなんて言わないで……私は、あの人を愛してるのお……あなたのことなんて好きじゃないんだから不倫じゃ……っんあアツツツ！」

しかし、麗は止まらない。今の麗にとっては、不義を働く事実も快感を高めるスパイスでしかない。これまでの非常識な性的出来事で育った被虐心が、そうさせていた。彼女はやめるどころか腰振りを早める。髪を振り乱し、獣じみたよがり声をあげながら、不倫セックスを堪能する。

「奥さんは不倫してるんだよ。旦那を愛していようが、俺を愛してしまい、他の男のチンポを啜え込んで、腰振りダンスをしてるんだからな。なんなら、旦那に判断してもらおうか？」

京一郎の台詞が、出入り口から夫が入室してくる光景を麗に想像させた。夫は愕然として、打ちひしがれた顔でガツクリと膝を落としている。虚像だと分かっているも、胸が鈍く痛んだ。

「ああつ、駄目え、んあああつ、あ、ああ、あの人には知られたくない……不倫してるって……浮気してるって嫌われちゃうからあああ、くうううううううううう」

「ふへへへ、ようやく分かったか。おらつ、この淫乱奥さんめ、俺との不倫セックスは気持ちいいか？ 愛する旦那でない男との浮気セックスはやめられないか？」

仰向けの状態で後頭部の後ろに手を組んだまま、京一郎が腰を上下動させる。反動

でベッドがきしむほどの突き上げが子宮口を重く強く圧迫し、子宮側へと押し上げる。「んあああつ、いいのおおおお、不倫セックス気持ちいいいい、浮気セックスやめられないっつ」

子宮が揺さぶられる快感振動に、麗は嬌声をあげながら不埒な肯定を繰り返す。

「おつくつ、浮気だの不倫だのと言うと締めまりが強くなるな……んっ、こいつは……へへ、奥さんイキそうなんだな。マンコの締めまりが思い切り強くなってきた……ほら、チンポは返してやる。好きな風にイクといい」

膣口の締めまりがまし、反対に奥が緩くなり始めたのを感じ、腰の上下動を止める。

「あああつ、イクっ、イクううう……んあああつ、不倫セックスでイッチャう……ああ、イクうっつ……あああああつっ」

麗は背筋を反らし、膣口から最奥までをカリ首に擦らせるダイナミックな抜き差しを行い、亀頭の先端を真っ直ぐに子宮口にぶつける。

子宮口が押し上げられる快感に耽溺しながら、絶頂を目指す。男との結合部で愛液を飛び散らせて互いの股間から太腿を汚し、全身を上気させながら、膝を効かせて腰を上下動する。

夫を愛し、彼に尽くす普段の彼女の姿を知るものであれば目を疑う光景だった。髪を振り乱しながら快感を求めるその姿はまるつきり痴女のそれである。

## 第五話 心と身体に広がる染み

「イクツ……んあああつ、イキそうつ、本当にイクツ……あああ、不倫なのにつ……浮気セツクスなのによめられなくて……あああつ、イク、イクツ、イツクツツツ……」  
「！！」

ビクビクツ、ビクビクビク

！！

自分で子宮口に、勢いよく亀頭を嵌まりこませた瞬間、麗の背中が大きく反れて、八十八センチFカップの釣り鐘型巨乳が量感を撒き散らしながら跳ねた。勃起乳首が、宙空に鶉色の軌跡の線を描く。

「あああああ……」

「！！」

「ああ、麗ちゃんイツてる……自分で腰をガンガン使いながら、キョウちゃんのおチンポでお猿さんのオナニーみたいにいやらしく気持ちよくなってイツちゃった」

美月の揶揄するような言葉も、麗を正気付かせることはなく、むしろ、不貞を働いた背徳快感を大きくする推進材にしかならない。

人妻は後ろでに手をついて、天井を向きながら荒い息をつき、絶頂の余韻に浸っていた。

「ふああああ、はあはあ……はあ、んくつあ……あああ、すごいっ……すごかったああ……気持ちいい……」

乱れていた息が徐々に整っていく。

快感で一度満たされたことで、段々と麗に良心が戻ってきた。

射精もせずに膣内に居座り続ける逸物の存在感が、次第に胸を抉るナイフになっていった。心地いいはずの絶頂後の倦怠感が身体に纏わりつくへドロロとしか思えない。

（やだ私……なんてことを……こんな……不倫で……しかもイツちゃうなんて……あの人にどんな顔をして会えばいいのよ……）

少しずつ、乱倫罪悪感が伸しかかってくる。先ほどまでは背徳快感を高めた感情も、今は、快感よりも良心を痛ませるものだった。

すぐにこの場から逃げ出して、早く家に帰って身体を綺麗にしたい。そんな気持ちで心の中で広がり始めた時、

「派手にイツたな奥さん。今度は俺もイかせてもらうぜ」

傲然と仰向けになっていた京一郎が麗の手を取った。人妻を腹に乗せたまま起きあがり、彼女はゴロンと仰向けになった。

「いやっ、もう許してよ、帰ってもいいんでしょ……？ 私はもう、あの人を裏切る真似は　　ついやあああんっ」

ズンツと奥まで突き上げられると、抵抗していた口から甘いあえぎが飛びだした。

結果が分かっていたことが、その通りになってほくそ笑むように、京一郎はニヤリとした。

## 第五話 心と身体に広がる染み

「一回イツて性欲が引いたか。けど、本性がスケベだからすぐにあんあん言ってくれるだろうなあ」

麗を見下ろしながら、二度、三度と突き上げを見舞う。すると、彼女の意志に反して膣壁がペニスに絡みつき、きゅうきゅう締め上げ始めた。愛液の分泌も盛んになって、逸物への歓待は豪勢になる一方だった。

「いや……んっんんん、だめ、なのに……あああっ、感じちゃう……あっ、い、一度イツたばかりなのに……お、奥に響くうっツツ」

（ああっ、いやなのにまた気持ちよくなっちゃうっ、力が抜けてっ、んんっ、恥ずかしい声が抑えられないっ）

男に組み伏せられて犯されるのは、欲望のまま、自分の好きなように動けた騎乗位とは別格だった。

逞しい腰が一振りされる毎に、子宮だけでなく身体の芯から揺さぶられる。身も心も蕩けるような心地よさだった。こんなことを続けてはいけないと思う良心を腐食させ、このまま身を委ねたいという自堕落な感情を膨らませる。

腰が引いて肉棒が抜かれると、外側に大きく張り出したカリ首が夥しい量の愛液を掻き出す。透明であるはずの愛液は白みを帯びていて、自分がすこぶる感じてしまっていることを思い知らせた。



## 第五話 心と身体に広がる染み

肉棒は麗の膣で磨かれているかのように、抜き差しをする度に、充実度合いを増していつている。竿も亀頭もパンパンに張りつめて、脈打つ力強さはまるで運動した後の心臓のよう。雄々しい牡に抱かれるのを望む牝本能をダイレクトに魅惑してくる。カリ首で膣壁を擦られる快美も文句のつけようがなく、ずっと味わっていたいと思わせた。

「はあっ、あはあんっ、いいっ、気持ちいい……んあああっ」

「くくく、蕩けた顔しやがって……どうだ、これで自分がドスケベ淫乱人妻だって分かったろ。このままイかせてまた失神させてやるよ」

京一郎は勝ち誇った顔で腰を繰り出す。一突き一突きに牝の心をも征服し尽くそうと、いう情念が籠もっており、麗の意識はどんどん極彩色に染まっていく。

（だ、だめよ……気絶したら、ああっ、また落書きされちゃう……自分で騎乗位をしていた時は、この男が動かなかったから失神は免れたけど……んっああっ、このままイカせるつもりで責められたら、また失神しちゃうッ！）

夫以外の男に絶頂失神させられる醜態も屈辱的だが、眠っている時に落書きをされたら、またこの男と接触しなければならぬ。交換条件に抱かせる言われたら、このままズルズルと関係が続けてしまったら、汚されただけでなくこの男に逆らえなくなるのではないだろうか。

そこまで危機感を覚えるほどに肉棒の魅力は甚だしく、この男とのセックスのドス黒い快感は蠱惑的なのだ。

「おらおら、またマンコの入り口が締まって、奥が広がってきたぜ……くくく、マンコの肉も俺のモノに絡みついて奥へ誘って……奥さんのスケベ汁もモノにじわつとかかつて、ヌルヌルで最高だな……さあ奥さん、今日もイカせてやるよ。イッて失神するのは気持ちよかつたる？」

京一郎のピストンは、技巧も何もない、ただ牡の力と威力を子宮口に叩きつける直線的な抜き差しだった。

それが悔しかった。幼稚なセックスに絶頂させられようとしている事實は、敗北感を感じさせる。単純なセックスで心身を蕩ける位に淫らにされたのだと哀しみ混じりの屈辱が身に染みる。

だが、その感情も快感を高める方に作用してしまふ。再び身体が昂っていることで、マゾ心が顔を出し、惨めな状況に悦楽を感じるようになっていた。

先ほど何度も口にした、不倫や浮気などという言葉が耳に蘇り、心に暗い快感を起す。

夫を想像してこの魔悦から逃れようとしても、全身を隅なく舐め回された記憶と、征服箇所に書かれたチエックマークが許さない。そこまで汚れておきながら、愛する

## 第五話 心と身体に広がる染み

夫にすがろうとするのかという意識にすり替わり、それも被虐心を燃え上がらせる。  
（もう、戻れないんだわ……綺麗だった昔の私にはもう……この男に、変えられて……こんな風に、穢されて……ああ、あなたごめんなさい……私この男に……こんな男のチンポに負けちゃったの……許して、あなた……）

夫とでは決して味わえない、暴力的でありながら魅惑的で、乱倫的でありながらドロツとした蜜のような背徳快感の中、変えられてしまった自分を悟る。

「あああつ、ああんんっ、イクッ、またイツちゃう……不倫セックスで、ああつ、またイクウウウっ」

どうせ戻れないのなら、この快樂に溺れてしまえ。そんな捨て鉢な感情が、卑語を迸らせる。

「どうだ奥さん、不倫は好きか？ 浮気は最高か？」

「好きっ、不倫いいっ、あああんんっ、浮気大好きっ、堪らない、も、もう我慢できないいいい、ああっ、イク、イク、イクッッッッ！」

「おら、出すぞ……俺のザーメンを食らわせてやる……んおおっ……奥さんのマンコに磨き抜かれてバキバキになって……奥さんが一人でイツた時も堪えたからなあ……かなり飛ぶぜえ？ 量もたんまり出るだろうな……俺のチンポも腹の底も熱くてすげえ気持ちいいから分かるぜ……おお、おおおっ、おおおおお、そうらああああ



## 第五話 心と身体に広がる染み

「あああ！」

膣の入り口から子宮口までを、勃起しきったカリ首で強く擦り上げた後、子宮口を思い切り突く。子宮どころか身体までもが押し上げられたかのような衝撃が引き金となり、ふたりは絶頂に達する。

ドビュルルルルルルルツツツ！ ドブドブドブドブドブ~~~~！！  
「イクイクイクイクウウウ、ああ、イクウウツツ~~~~！！」

長く尾を引く桃色の叫びを上げながら、麗は肩胛骨と尻とでブリッジした。勃起乳首が天井に釣り上げられたみたいに、釣り鐘型の巨乳が大きく跳ねる。

入り口から最奥までミッチリ埋まった牡肉塊は、力強い脈動を繰り返しながら、痙攣する膣に自身の絶頂振幅を伝え、密着した子宮口に精液を放出している。

ドクドクと容赦なく吐き出される精液は、マグマのように熱くてドロドロだった。数日間の禁欲生活の末に夫が膣内射精した時を思い出させたが、この射精は不倫セックスでの射精なのだ。イケナイ膣内射精は、夫とでは味わえないドス黒い悦楽も味わせる。

「ああんんっ、出てるうう、ああっ、ザーメンどくっどくって……私の中が、あの人のでない精液に満たされてるっっっ」

他の男の精液で子宮口が濡れ、膣内に染み込んでくるのが鮮明に分かる。勝手に、

染められ奥さん

そのイメージが頭の中に浮かび、自分が他の男に膣内射精されている意識が強まり、そのプロセスも膣内射精される気持ちよさを濃密にする。

「ああ……すごい……んんっ……すごおい………」

赤い顔で切れ長の目を弛ませながら、麗は絶頂失神の奈落へと墜ちていく。

もう、昔の自分ではいられないと悟った人妻は、訪れるまどろみに抵抗しない。

愛する夫との愛情に満ちたセックスでは絶対に味わえない、背徳の蜜時が再来するであろうことに胸をトキメかせながら、暗闇の引力に引かれていった。

# 最終話 新しい幸せのカタチ

ピンポーン

よく晴れた正午。三葉田家のドアチャイムが鳴り響いた。幸田は仕事に出ており、家には麗しかいない。

「……………」

エプロン姿で家事をしていた麗が、顔を曇らせて対応に出る。

「よお、奥さん。今日も綺麗だな。ノースリーブにホットパンツ、その上からフリル付きのエプロンとは、えらくお似合いだぜ。そんな姿で出迎えられたら、疲れなんてぶっ飛ばさるうなあ。旦那が羨ましいぜ」

ドアの向こうにスーツ姿の京一郎が立っていた。まるで我が家に帰宅して、自分の妻に迎えられたかのような馴れ馴れしい態度だった。

「早く上がって……………こんなところ、ご近所に見られたら噂が立つちゃうから……………」  
俯きながらぶつきらぼうに言い放ち、家の奥へと歩いていく。

ホットパンツにぎゅうぎゅう詰めになっているお尻がふるふる揺れ、背中からはみ出す八十八センチの巨乳もタプンタプンと揺れている。細腰の後ろでは、エプロンの

帯紐が綺麗にリボン結びにされていた。

「へへ、うまそうな後ろ姿だぜ」

京一郎は愛人でも見るかのような目で、ダイニングに入っていく人妻を少しの間凝視した。

「おおつ、美味そうな料理だ……うん、美味しい……奥さんの旦那は、毎日こんな物を食ってるのか……嫉妬しちまうなあ」

ぶり大根、竜田揚げ、刻んだモロヘイヤ、野菜サラダそしてほかほかご飯。テーブルに並べられた昼食に舌鼓を打つ京一郎。

そのどれもが、幸田が一生懸命に稼いだ給料で購入された物であり、作ったのは彼自慢の愛妻であった。

愛する夫への裏切り行為をしている妻は、心を痛めていた。

その痛みから逃れたくて、自分が仕方なくしていることを確認したくて、麗は口を開く。

「薬は持ってきてくれたんでしょうね」

「あん？ ああ、もちろんだ」

懐から小瓶を取り出し、無造作にテーブルに転がした。

醤油瓶に当たって止まったが、その時のガラス同士がぶつかる甲高い音が、麗には

やけに大きく聞こえた。

「こいつを持ってくると言って、持ってこなかったことはなかったら？」

前回の情事後、麗はまた身体に手をつけられた。その汚れを落とすために、京一郎と会っているのだった。

（こんなに近くに薬が……手を伸ばせば届くわ……）

受け取るには、こうして食事の世話をした後に抱かれなくてはいけないのだが、やろうと思えば、約束を反故にして奪うこともできるだろう。

だが、そうすれば約束を破ったという後味の悪さを一生引きずることになる。

そして、京一郎もそんな女には愛想を尽かすだろう。肉体を汚し、精神をも穢す手管を考えれば、彼はグルメなのだ。単にセックスで人妻をいいなりにすることはなく、精神力の強い女を墮落させることを好んでいる。ならば、約束を守らない下らない女に執着するとは思えない。

縁が切れるのは喜ばしいが、それは不倫の快楽を味わえなくなることであり、背悦の味から離れられなくなっている麗にとっては好ましくないことである。

彼は瓶を転がすことで、麗のそんな淫らな葛藤を見透かして楽しんでいるのだろう。

（ああ……私……本当に弱い女になってしまったのね……この男に……愛していないどころか、今も嫌いなのに……逆らえなくなってる……）

「どうした奥さん。箸が進んでねえぞ。これからたっぷり運動するんだから、食っていてくれよな」

京一郎がニヤニヤ笑いながら言った。

食事が終わると、麗は夫婦の寝室に案内させられた。

これから不倫セックスをするのは分かっていたので、自室に招こうとしたのだが、京一郎は譲らなかつた。麗は嫌だったが、本能的に逆らえなくなっているので押し通すことはできなかつた。

「ここが奥さんと旦那の愛の巣か。くく、よく掃除されたいい部屋じゃねえか。旦那に抱かれるのを思いながら、恋人とのセックス前に身繕いする女みてえに、愛情込めて掃除してるんだらうなあ」

ベッドにどっかり座りながら、入り口で佇む麗に目をやる。

（とうとうここまで……私にとってはあの人との聖域のこの場所にまで、こんな男を入れてしまつて……）

罪悪感で胸が張り裂けそうだ。しかし、その一方で、これから始まる情事への期待感も感じていた。心を苛む罪悪感も、マゾ気質が定着した今では被虐的な快感であつた。

「それじゃ、奥さん脱いでくれ。裸になるんだ。その前に、照明をつけてな」

麗は言われた通りに照明をつけた。部屋には厚いカーテンが引かれてある。既にエアコンがつけてあったので、部屋は快適だったが、真っ昼間に部屋を閉め切り、照明をつけながら男とふたりきりである状況は、メロドラマのワンシーンそのものであり、本当に自分是不倫をしているのだと強く意識させられる。

しかも、これからの情事に期待して胸を高鳴らせているのだ。救いような不貞妻に墜ちてしまったと思わずにはいられない。

（あなたごめんなさい……でも、本当にこんな男は好きでもないから……愛しているのはあなたただけだから……だから、少しだけ許して……）

妻を幸せにしたくて、今も一生懸命働いている夫を思い浮かべながら、京一郎の命令通りに脱衣する。

スルスル……シユルツ……。

エプロンを外し、ノースリーブの上着を脱ぎ、ホットパンツを床に落とす。こうなることは分かっていたので、下着はつけなかった。

「へへへ、綺麗だぜ奥さん」

脱いだ勢いで八十八センチの巨乳が控えめに揺れた。細いくびれと八十八センチのヒップが姿を現し、乳房の量感を引き立てる。

淡雪めいた美肌も、照明の下でいっそうの輝きを放っている。

どれも、夫の稼ぎで買った食品や美容薬品と、麗自身の努力、そして夫婦の愛の営みを通して磨きあげられた肉の芸術品だった。

だが、今それには他の男の趣味が刻み込まれている。

（ああ、見てる……私の身体についた……模様を……模様のついた身体を……）

乳房や腹部を中心に蝶などの模様が描かれていた。舐め回された時のチェックマークとは違い、宝石でも散りばめられているかのような美麗さを美肌に付加している。

少し前の麗であれば、忌々しい模様としか思えなかったが、京一郎に馴致された今では、彼との背徳情事を想起させるカギ刺激めいたものに変わっていた。餌の時にベルを聞かされ続けた犬が、ベルを聞くだけで涎を垂らすように、模様を見るだけで発情してしまうのだ。

見ているだけで身体が火照り、あると思うだけで秘所が疼いて潤んでくる。

「それじゃ、やろうか奥さん」

京一郎が手招きし、麗が彼に歩み寄る。

「ああっ……んんう……はぁ……ちくび……ふうああ」

乳頭が彼の鼻先にくると、赤子のように吸い付かれた。乳輪ごと啜え込み、口内で舌を使って舐め回す。乳首はレロレロとなぎ倒され、起きあがりこぼしみたいに戻る。

なま暖かい口内は心地よく、唾液でぬめぬめの分厚い舌での愛撫は、むず痒さめいた快感を感じさせる。

乳首を起点に乳房がじんわり温かくなり、身体がますます火照ってくる。

「ちゅぽんっ……乳首が硬くなってきたな。興奮してるのか奥さん……なあ、聞かせてくれ。奥さんは俺が好きか？」

ニヤつきながら、上目遣いで訊ねてくる。答えは知っているという顔で。

「嫌いよ……だいつきらい……！んああっ」

頬を紅潮させ、目尻に弛緩と緊張を行き来させながら麗は彼の目を見て断言した。

聞き終えた京一郎は、また乳首にしゃぶりつく。不倫をさせている人妻の拒絶に失望するどころか、いやらしい嬉色を浮かべて彼女を快感責めする。

「ふへへへ、美肌に俺が選んだ模様が貼り付いているのを眺めながら、俺を好きでもない人妻の乳首をしゃぶる……堪んねえなあ……」

（くうう……こんな男……本当に嫌いなのに……ああ、で、でも気持ちいい……吐き気とか怖気とかよりも、快感の方が強いなんて……悔しい……ッ）

膝から下の力が抜け、内腿がヒクヒク痙攣している。乳首をしゃぶられているだけなのに。

乳首が勃起するに従い感度も上昇していき、おぞましくも狂おしい乳首快感はいよ

いよ麗に伸しかかる。

「ところで、旦那とは最近やってるのか奥さん」

乳首から口を離し、今度は両胸をふにふにと掴み揉みながら、顔を上げずに訊ねてくる。彼の目は、自分の手で胸肌に貼り付けた、麗にとっては首輪にも等しい、きらびやかな模様がひしゃげる様を楽しそうに見ている。

「ふっん……や、やってるってなにをよ……」

「決まってるだろ？ セックスだよセックス。一生懸命頑張ってる旦那様に肉体奉仕してるのかよ」

「そんなこと、言わなくちゃ、んふうああっ」

家庭内の情交事情を他人に話す義理などないし、そんな恥ずかしいことまで暴露したくはなかったたので、突っぱねようとした刹那、胸をギュッと驚掴みにされた。

「教えるよ奥さん……俺は奥さんの家庭を壊す気はないから気になるんだよ……」

…なあ、いいだろお」

無骨な指を遠慮なく食い込ませながら、追い打ちをかけてくる。一見すると荒々しいのだが、麗の表情を見ながらリズムカルに弱所を突いてくる。

はしたないあえぎを上げずにはいられない揉み込みで、胸が甘ったるく締め付けられる。言うものかという意固地さがどんどん融解していく。

子供が母親に甘えるように囁く京一郎だが、その目は肉食獣のようにギラついており、モノにした女が逆らうのを許さない強い意志の光が宿っていた。

「あううん……はああ、ああ、し、してるわ……」

本能的に逆らえなくなっている麗は、快感と威圧感に蹴り飛ばされるような形で真実を告げる。

「裸でか？」

「んふう……ち、違っわ……こんな身体はあの人に見せられないから……はあ、はあ、見せて嫌われたくないから……服を着たままでよ……うふんん」

言っている間に、美肌を見せてもらえなくて残念そうにしていた夫の顔が頭に浮かぶ。それが麗の心をチクリと刺したが、他の男の胸愛撫の気持ちよさのせいですぐに霧散してしまった。

「そいつは結構。だが、旦那は可哀想になあ。オマンコできても、こんな綺麗な肌を見れないし、味わえないんだからなあ」

乳房を揉んでいた利き手を、下へとスライドさせる。うっすらと浮く肋骨を撫で降り、仄かに窪んだ贅肉のない腹部を滑る。縦長のへそに沿って一周した後、ふっくらした恥丘へと降りていく。

「んんっ……あああっ……オマンコに……んああっ」

じゅぷううう……じゅぽつ、にゅぷつつ……。

「へへ、もうすっかりぐしよ濡れだな。旦那との大切なベッドルームで他の男に裸を見せて愛撫されてるのに、遠慮なく熱くなってやがる」

へその下に手首がくる風にして股間と手の平を密着させ、中指を秘裂の中に埋め込む。根本まで入り込んだ指は鉤状に曲がり、膣肉を引っ搔いてくる。

「ああっ……うくっ……はあ、はあ……ああ、指で引っ搔かれて……ああっ、感じちやううっ……」

麗の膣壁は谷間が深く、快感刺激を感じやすい敏感粘膜だった。夫の情事で鍛えられた結果なのだが、それを弄るのは夫ではない。

「いいっ、オマンコ、いいっ、ああっ、搔きまわしてえ……んふうう」

「こうかい？ 奥さん」

ぐちゅっ、ぬちゅっ、ぐちゅぐちゅぐちゅっ。

「はあああ、そう、それいいっ、気持ちいいっ、んふううっ」

快感の虜になった麗ははしたなくおねだりをして、京一郎は応えてやる。指先でそこかしこを引っ搔きながら、膣が一際ヒクついた場所を重点的に責める。

指を咥え込む秘唇の隙間から、愛液がトロトロ漏れてくる。指から手の平、手の甲に伝い、手首に至っても止まらず、肘に向かって進んでいく。

麗の下半身も濡れそぼっていた。内腿に幾筋もの愛液の筋が走り、膝に流れ、ふくらはぎと足まで汚しながら床に落ちている。

背筋を伸ばして直立している麗は感極まってゆらゆら揺れ、時々、快感のあまりに爪先立ちになっていた。

（あの人との寝室で……他の男にこんなにはしたなく……ああっ、ごめんなさい……あなたああ……でも、気持ちいいの……お）

罪悪感に駆られて胸中で詫びるが、それも快感を高める薪でしかない。今や人妻の謝罪は、夫婦にとっては意味の軽いものになり果てている。

「オマンコがうねってるぜ。堪らないんだな。俺のチンポをねじこんで、掻き回して、突きまくってやろうか？」

（ね、ねじ込んで……掻き回して、はあ……はあ、っ、突きまくるっ……うのお……）  
一言一言が、発情人妻に淫らな想像をさせる。目の前の夫婦のベッドで、自分が言葉通りに責められる様子が脳裏をよぎる。過去に性交渉をした時の記憶が、心と身体に思い浮かび、その妄想を鮮明にする。

麗の目が、スーツボンの股間に注がれる。

（ああ……大きくなって……硬く膨らんで……っ）

こんもりと盛り上がっていた。実物を見ている麗には、裸になったその様子が見

えるようだった。想像するだけで、膣内が堪らない疼きに襲われる。もう、一時も我慢できなかつた。

「くっくっくっ……そんな熱い眼差しで人妻にチンポを見られちゃ興奮しちまうじえねえか……こいつが欲しかったら、言うことを聞くんだ」

「うあ……わ、分かっているわ……ああ、早くいつて頂戴……何でも言うこと聞くからあ……はあああ……」

京一郎はそれを告げる。麗が命令を実行する間、彼は裸になり始めた。

（ああああ……こんな格好をさせるなんて……こんな、恥ずかしい格好を……）

麗はガニ股の体勢で仰向けになっていた。太腿を大きく開いて、腿の裏とふくらはぎをくっつけている。胸を間に挟んだ向こう側には愛液塗れのふくよかな恥丘があり、そのさらに先で、これから自分を滅茶苦茶にする巨根の持ち主が服を脱ぎ捨てている。

（はあっ、はあっ……こ、これから私はセックスするんだわ……不倫セックスを……）

あの人とのベッドの上で……ああ、私はなんていけない女なの……あの方は自分と私との幸せな生活を維持するために仕事を頑張っているのに……私は、不倫セックスに期待して、まだおチンポを入れられてもいないのに、オマンコをぐしょぐしょアツアツに発情させてる……っ）

魅惑的な甘美を伴い、心臓がドキンドキン跳ねている。ひとりでに股間が持ち上が

り、秘裂からこぼれた愛液が滝のように会陰を伝っていく。

途中でやめようなどと言う意識は欠片もなかった。自分をこんなに変えてしまった男が、準備を整えるのを待ち遠しく思いながら、麗はガニ股仰向けの姿で彼をじっと待つ。

「くくくつ……そんなスケベな格好で律儀にまっけてくれて嬉しいぜ奥さん……こいつがそんなに欲しかったか？」

へそ近くまで反り返る勃起巨根を、腹筋を効かせてピコピコ振る。ねこじやらしに目を奪われた猫のように、麗の目がそれを追いかけた。

「ああ欲しいのっ……スケベな麗は欲しくてたまらないのお……ああっ、くださいっ、お情けをお……バキバキチンポのお情けをくださいっっっ」

上気した顔で股の向こう側の男に懇願する姿には、貞淑な人妻の面影は微塵もなく、下劣なゆすり屋を嫌悪して堂々と立ち向かった正しさも見つけられない。

愛液を垂れ流しながらふしだらな台詞を言う麗は、情欲に溺れた牝の貌をしていた。「いいぜ。旦那と寝るベッドの上で、俺のチンポを味わわせてやる」

京一郎はベッドに上がると膝立ちになり、麗の上空に覆い被さってきた。

利き手で逸物の根本を掴み、亀頭を麗の秘裂に宛てがう。

「っうんんんッッッ！」



接触した箇所から圧倒的な熱が伝わってくる。力強い脈動も肌に伝播して、膣の内  
部を震わせる。待望の牡棒が間近に来たことで、待ち遠しいと言わんばかりに膣が激  
しく疼き始めた。

「あんっ、は、はやくっ、早くくださいっ、私のオマンコに、そのすごいチンポ入れ  
てえっ」

「ああ。そうらよッ」

膝ですり足をしながら、亀頭の先っぽが埋まった肉棒を、人妻の秘裂に深く突き立  
てていく。

ぐじゅっ……ずっぷううううう~~~~~！

秘唇が肉棒の円周に沿って丸くなり、鈍い水音を響かせながら愛液が押し出される。  
「んあああああっ、入ってきたあ……ああっ、やっぱり熱いつ、燃えちやいそうな位  
に熱くって……ああ、広がってるっ、私の中、広がってるっ」

ずっしりとした重量感が膣内を拡張していく。カリ首が襷を擦りながら通過してい  
くに従い、膣内で快感電流が荒れ狂う。挿入されているだけだというのに、麗は絶頂  
したみたいに背中を仰け反らせる。

「ふへへへへ、奥さんのマンコ肉、俺のチンポに絡みついて締め付けてくるぜ。前よ  
りも馴染んだ感じだな……ああっ、気持ちいい……奥さんの中は、熱くてぬかるんで

て最高だぞ」

夫と愛の営みをしているベッドの上で、間男は感嘆の感想を言い放つ。

「よおし、奥まで届いた……さて奥さん、どうして欲しい？　ねじこんだ後は、どう  
されたい？」

快感のあまり顎を盛んに跳ねさせている麗に訊ねる。

「ああ……ねじ込んだ後はあ……か、掻き回して、突きまくって欲しいっ……ああ、  
はやくはやく……」

「ここは旦那と寝るベッドなんだろう？　そんな大事なところで俺と不倫セックスな  
んていいのか？」

はしたなくねだっていた麗が苦しそうにわなないた。

（この期に及んでまだ私に恥をかかせようと……あの人を裏切らせようと……ああ  
あつ、で、でもお、私……私言っちゃおう……この男の思う壺だって分かってても言っ  
ちやう……）

「ここまでされて性行を終わりにされるなど考えられないこともあるが、不貞の台詞  
を言うと思うと、背筋にドス黒いゾクゾク感が走り、もっとそれを味わいたいと考え  
てしまふ。

「い、いいのっ……いいからくださいっ、あの人とのベッドの上でお情けを……不倫

セックスしてください……！」

「奥さんは俺のこと好きか？ 愛してるか？ 正直に言えよ？」

「き、嫌いよ、大っ嫌いっ！ あなたみたいな下衆な男は見たことない…… あああ、本当に嫌いだけど……ほ……い……」

「嫌いだけど、ほ、なんだよ。最後まで聞こえるように言ってくれよ奥さん」

「欲しいのっ、あなたのチンポのお情けが欲しくて堪らないの、お願いっ、ちょうだいよお」

啖呵を切るように言い切った麗だったが、最後の方は涙目になっていた。なかなか行為を始めない男に焦れたように、巨根を咥え込んだ腰は円を描くように動いている。膣壁は肉棒に盛んに纏わりつき、愛液をドバドバ浴びせていた。

「くははは、いいぜ、だいつきらいな男のチンポで気持ちよくしてやるよ奥さん」

京一郎は勝ち誇った顔で腰をゆっくり引いていき、愛液を掻き出しながら力り首まで引き抜いたところで、一気に最奥まで突き込んだ。

「んあああつ……！」

長く尾を引く牝声が響き渡る。

強烈な一突きは、全身を甘く痺れさせた。頭の芯まで揺さぶられ、軽い絶頂感まで味わわされる。

「すごいっ、ああああ、すごいいいいい……んはあああっ！」

「おらおら、どうだ、大嫌いな男のチンポの味は」

「いいのっ、すごくいいっ……あああっ気持ちいいっ」

嬌声を上げながら口から舌をはみ出させる麗。目は蕩けきってこぼれ落ちそうだった。額やこめかみに髪が貼り付き、上気して汗の膜がかかる顔全体が、照明を反射して七色に輝いている。

「俺は大嫌いだそうだが、不倫セックスも嫌いか？」

「はあ、はあっ、ふ、不倫セックスは好きっ、あなたは嫌いだけど、あなたとの不倫セックスは大好きっ、はあああああ」

夫との愛情に満ちた性行も愛しいが、好きでもないこの男との乱倫情交も捨てられない。この男とでなければ、愛する夫が失望するようなことをする背徳感も、そんな行為に走る罪悪を自分の良心に責められる被虐快感も楽しめない。

「旦那が懸命に働いてるのに、他の男とセックスしてよがっていいのか奥さん……しかも、ここは旦那と愛し合うベッドだぞ？」

「い、いいのっ、気持ちいいからっ……ああ、はああああああ、今でなきや、ここのでなきやこんなに気持ちよくなれないからああっ」

目が眩む背徳快感に浸りながら、麗は言い切る。

彼女の悦楽が深まるにつれ、膣がビクビクと痙攣し始めた。入り口が締めまり、奥が広がっていく。

「ふへへへ、奥さん、イキそうじゃねえか……そうだ、今回は俺も一緒にイかせてもらうぜ。いいよな、奥さん」

麗はコクコク頷いた。以前はあれほど嫌がったというのに、今は頷く度に膣の締め上げが進行している。

「このまま中出しするぜえ……俺とのガキを孕んじまうかも知れねえが構わねーよな？」

（この男の子供を……妊娠する……？）

快楽でぼやけていた意識が霧が晴れるように冴えを取り戻す。

（そんなのダメ……流石に妊娠は……でも、断ったら……中出しされないわよね）

膣内射精を意識すると、以前に中出しされた時の様子が思い出された。男根に突きほぐされた膣に熱い精液を注がれる快感は、夫にされる時も堪らない。だが、この男にされる場合は、それに加えて被虐快感と背徳快感という精神的な悦楽も味わえるのだ。

（ああ、ダメだけど欲しい……して膣内射精……されたい……熱いので……あ、熱い

ので満たされたい……)

膣だけでなく、子宮もそれを望んで疼き出す。もしかしたら、今を逃せばもう二度と味わえないかも知れない。そう思うと、心臓がひっくり返りそうな位に鼓動が早くなった。

「どうする奥さん……いいのか？ 駄目なら……そうだな、首を振ってくれ。十秒待つ。あの壁掛け時計で計るからな。いくぞ……じゅう……」

愛する人の子だけを孕み育むという当たり前の意識と、それを踏みにじる背悦を堪能したいという欲望がせめぎあう。

麗は苦しそうに眉根を寄せて、歯をガチガチ震わせた。

だが、そうしている間も京一郎はピストンを続け、女として転墮することを誘惑している。

「あうん、はあっ、はあっ、あああっ、私はあ……！」

快感で消耗している麗も、首を振る位の力は残っている。だが、麗にとっては易しいことではなかった。首を振るのが当たり前だと思うのに、見えない手で押さえつけられているかのように首が重い。

「ぜろだ……ふへへへ、そんなに俺のザーメンが欲しいのかよ……いいぜ、望み通り、俺の汁で腹を膨らませるといい」

（あ……あ……私、中出しされちゃうのね……妊娠しなければならぬのね……）  
戦慄する麗だったが、心に訪れるのは後悔よりも期待だった。膣の中でペニスが刻一刻と膨らんで膣を押し返している感触が、ドス黒い期待感を増幅させる。

（ビクビク脈打って……ああああ、出るっ……私の中で精液でるのね……！）  
ペニスの脈動が短く早くなっている。子宮口を突いては離れていた亀頭が、最後の膨張を始めている。

「おっと……ただ、まだ出さないぜ……よっ」  
逸物を最奥まで埋め込むや、京一郎は動きを止めた。膣に包まれるペニスの脈動が、少しずつ静かになっていく。

「ああ……っ」  
膣内射精されるものだとばかり思い、その瞬間を待っていた麗は物足りげな吐息をこぼす。京一郎を見る目も、どこか恨みがましいものだった。

きゅっ、きゅっ……っ。

「へへへ……これでよし。あとは、奥さん、あんたがここに自分の名前を書くだけだ。ほら、こいつを使い」

ベッドの端に引っかけていたスーツから太い黒ペンを取りだして、それで麗との結合部にあいあい傘を書いた。名前を書くべき片方の欄には、繋がったふたりの性器が

きている。京一郎は、麗にもう片側に自分の名前を書けと言ったのだった。

(そんな恥ずかしいこと……)

そんなことをすれば、自分は彼の逸物と好き合っていると下品に表明することになるだろう。本人は嫌いで、性器　この男とのセックスは好きなどと痴女にも劣る浅ましい心を文字に書いて表すことになる。

ぐぶううう~~~~、にゅつぶつううつ~~~~。

「ああんっ……はあっつ、あああ、お、奥がああっ」

京一郎は、麗を後押しするように腰をグラインドする。最大の泣き所である子宮口がじつくりねっとり抉られて、麗の羞恥心が蕩けていく。

代わりに顔を出すのは、マゾ心によって変換された羞恥快感だった。低劣なことに手を染める自分の姿が一人でに脳裏をよぎり、被虐心を昂らせる。

(こ、こんなこと駄目なのに……ああ、でも、ここまで墜ちてしまったのだから……もつと墜ちたい……惨めなことを要求されて、犬みたいに従順に実行して……はあああ……気持ちよくなりたい……)

麗は震える手でペンを受け取ると、手を震わせながらたどたどしく『うるわ』と書いた。

(ああああ、か、書いてしまった……私、書いちゃったあああああっつ)

書き終わると、目の前に極彩色の虹が乱舞し、心臓が破裂しそうな位に脈動した。胸の詰まりは至極心地よく、文字を三文字書いただけで軽い絶頂感を味わってしまった。

「よおし、よく書いたな奥さん……奥さんが大好きなこのチンポから、思い切り妊娠汁を出してやるよ」

ニイツと唇の端を釣り上げると、京一郎は今度こそラストスパートに入った。

最奥に子宮口を密着させたまま、ゼロ距離から子宮を揺さぶる。子宮口が、愛液のぬめぬめ感と、どっしりとしたプリプリ感たっぷりの牡肉塊で何度も小刻みに押し上げられる。

「んああっ、すごいっ、こんなの初めてえ、んんっあああああああ〜〜〜っ、ああ、ビクビクしてる、お腹の中で脈打って、んはああ、出るわ精液……ああっ、出そうっ、先っぽが膨らんで、あああっ出るうううううッッッッ！」

膣内射精されようとしているのに、麗の腰は彼の腰と息を合わせて、絶頂を目指して突き進んでいた。

夫でない男のペニスを包み込む膣も、絶頂間際の痙攣を起こしながら愛液を吐き出し続けている。

一番奥で突き込まれているというのに、性器の結合部からは果実を搾っているみた





「ああ、出してるぜ奥さん……気持ちいいぜ……奥さんのマンコの中に俺の子種を注ぐのは最高だぞ……くうっ、おおおっ、奥さん、俺のザーメンで孕んだら、旦那と協力して俺の息子を立派に育ててくれよな、っう……！」

歯を食いしばって気持ちよさそうに射精をしながら、また腰を使い出す。絶頂痙攣が収まらない膈内でピストンして、京一郎は陰囊からありったけの精液を搾り出そうとする。その目は、墮とした女の卵子までもを制圧してやるうとする精力旺盛で傲慢な牡の欲望の光を放っている。

（ああっ、すごく濃い……満腹してるみたい、お腹にどっしりきて……こんなに濃いのをこんなたくさん注がれたら本当に妊娠しちゃう……あの人のベッドの上で、こんな男と子作りセックスしちゃってるみたい……不倫なのに……ああっ、不倫子作りセックスで妊娠しちゃっ）

許されないことをしていると意識するほど、抗い難いドロドロの快楽に包まれる。麗の表情も、いけないのに感じてしまっ、という苦悶とも喜悦ともつかないものだった。

「へへへっ、他の男に孕まされちまうかも知れないってのに、スケベな貌してるな奥さん。そんな貌するなら、こうしてやるよ」

京一郎は駅弁売りみたいに、自分の逸物をはめ込んでいる細腰を持ち上げた。麗の

股間からお腹までが斜めになり、精子満載の精液が子宮に滑り込み易くなる。

「あつああああ……だめえ……そんなことしたら……あふうう……」

拒絶の言葉を吐きつつも、麗は色っぽくため息をつくだけで抵抗らしい抵抗をしなかった。

夫にだけ捧げると決めていた身体を征服された上に、被虐心を開花させられ、不倫の喜びに溺れさせられた人妻は、下衆男のされるがままになっていた。

……

ガチャツ。

もしもし、麗？　どうかしたの？

「あ、あなた……はあつ……えとね……その……んんっ」

仕事中の夫の携帯電話に、麗は自宅の電話機から電話をかけていた。

彼女はバックで京一郎に貫かれ、不倫セックスの真っ最中だった。電話は玄関からすぐのところにあるので、誰かがきたら他の男との性行様子を見られてしまうという危うい状態でもある。

しかも麗の身体には、全身を舐められた時と同じくチェックマークがつけられてお

り、乾いたザーメンでテカテカしている。今度は唾液でなく精液を浴びせられたのだ。そうして穢し尽くされたあと、京一郎の命令で夫に電話をしたのだった。

「あ、あのね……私は、あなたを愛してるわ……んっ、あなたが一番大好きなの……っふん……」

他の男のザーメン塗れになり、他の男の趣味で落書きをされ、今も他の男にされるがままにバツクでピストンされ、そして輪っかの形にひしゃげた陰唇から白っぽい愛液をだらだら垂らしている女が言う。

そういう女に作り変えてしまった男は、彼女が他の男を愛していると言っても、以前と同じく落胆も怒りも見せない。反対にニヤニヤしているだけだった。

なんだい急に……何かあったの？ 息づかいも何か変だし……ひよっとして病気とか？ それで弱気になって、そんなことを言ってるのかい？

夫は心配そうな声をしていた。今にも仕事を放り出して帰宅すると言いかねない雰囲気だった。

「う、うん、違うの……あんっ……ただ、言いたくなって……あなたは、私のこと愛してる？」

当たり前じゃないか。愛してるし大好きだよ麗。いつもありがとう。その……麗が奥さんでいてくれるから、ぼくの人生はすごく充実してるから……いつも感謝し

てるよ。

「ありがとう……お仕事中に御免なさいね……はうあ……今夜も夕飯やお風呂の支度をして待つてるから、んっ、気をつけて帰ってきて……ああっ……ん、なに？ほ、ほんとに何でもないから……愛してるわあなた……それじゃ、電話切るわ……ああんっ、切るわね」

ガチャン。

「へへ、妬けるねえ……あなた愛してる、ぼくも愛してる麗か……すみませんねえ、旦那さん、あなたの大事な奥さんを、こんな変態マゾ牝にしちまって……ふへへへへ、おおっ、出るぞ奥さん、おおっ、出る出るでるッ」

「あつ、あつ、またオマンコの中でビクビクしてっ、ああっ、あああつ、あなたあ、ごめんなさいっ、私、また中出しされるっ」

ここまで墮とされても、電話での麗の言葉に嘘はない。幸田のことは愛しているし、彼と離婚して京一郎に走りたいなどとは思っていない。

だが、この下衆な男から離れられそうにないことも事実だった。夫とでは味わえない背徳蜜時の味は、そこまで甘美でそこまで麗の心身を変えてしまっている。きつと、そんな彼の命令には何でも従ってしまうだろう。

(ごめんなさいっ、あなたあ……でも、やめられないの……弱い私を許して……)

罪悪感を払拭するため、麗はこれまで以上に夫に尽くすだろうが、どんなに他人が羨む鴛鴦夫婦であっても、彼女の心には乱倫を求める欲望が刻まれているのだ。

「出して出してっ、孕ませてえっ」

根本的に変わってしまった人妻が、許されない膣内射精を懇願した。

淫らな恥声が、夫のいない夫婦の愛の巢に響き渡る。

終